

---

## その男、神の眼につき part2

神戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その男、神の眼につき part 2

### 【Nコード】

N0980X

### 【作者名】

神戒

### 【あらすじ】

時衛士が目覚める。

同時に、機関が、協会がそれぞれ動き出した。

そして巻き込まれる大勢の人間。巻き込まれる世界。やがて世界各国の軍も動き出し、参戦する。

時衛士は其中で、とある人探しを命ぜられた。

ただの傭兵。されど世界でもその道の人間ならば知らぬ程に有名で有能な、一人の男。

彼はその男の手がかりを見つけてロシアへと飛ぶのだが。

可及的速やかに拡散する物語。  
時衛士の、世界の運命はやがて決する事になる。

## ブローグ

夕刻から続く雨は、空が完全に闇に飲まれた頃に少し弱まった。

舗装されていない土は水を吸い込んで、ただ歩くだけでも体勢が不安定になるほどにグズグズだ。街から少し離れたそこを、手負いの男をつれた二人組が泥まみれになりながら走り続けていた。

腕から出血し、涙や鼻水に顔を汚しながら、何かに追われるように背後を注意深く気にして駆ける。彼らがそれぞれ手に握る突撃銃アサルトライフルの残弾は残り僅かであり、そしてそれが彼らの命を繋ぎ止める命綱であった。

「大丈夫かダニー！ 俺はここにいるぞ！」

肩を担ぎ、そして泥に滑って勢い良く転ぶ。肩を打ち付け呻く相棒に叫びながら、男は彼の支えになつて立ち上がらせた。

道という道はない。

そして背後からは、ただ一人の男が、走るわけでもなく、されど距離を開けても薄れることのない威圧だけを放出して彼らを追っていた。

「ちくしょう、畜生！くそつたれ なんで俺らがこんな事になつてんだよツ！」  
手負いが喚く。どうしようもない現実には押しつぶされて、その精神は限界を超えていた。

外の警備だからと、わざわざ機関の外に出て周囲を警戒していただけだった。

だというのに今はなぜだか逃げている。それは、”特異点能力者”に「逃走者」だと罵倒され、襲われたからだ。だがその『特異能力』ではなく、拳銃で腕を撃ちぬかれた。

そうして現在に至るが、逃げ切れるわけがない。

機関を相手にして、それが可能なはずがない。

ついさっきまで機関に所属していた彼らだからこそそれを確信する。”逃走者”は機関から抜けだそうとした愚か者だ。その末路は

肉塊でしか無い。極めて例外がないその存在は、仲間からの抹殺で役目を終える。

「なあダニー、知ってるか？」

「ああ、俺たちはもうすぐ死ぬってな」

「いや違う。同じ機関でも、もつと素晴らしい所があるらしいんだ」

「はっ、どうせアメリカだろ？」

もはや自暴自棄に、歩く気力すらなくなったダニーは座り込んで空を仰いだ。深淵を覗き込んだような色をする天。己の心とまったく同じ色をしたソレを見て、これからの事がどうでもよくなった。

どうせ死ぬ。

ならさっさと殺してもらったほうがいい。

ダニーは背中から倒れて、寝転んだ。

「日本だ。あそこはなんでも、たった一人の少年に”賭けて”いるらしい」

「少年に？　なんでもまた」

「知らねーよ。ただこっちにまでその話が届くって事は、この世界でも結構有名なんじゃねーのか？」

身体中の血が熱い。

機関にも少し違和感が現れ始めた。

協会もそろそろ本気を出すという。

そして俺たちが死ぬ。だが、妙な希望を抱いてしまう。

この後のこと。自分たちには一切関係ないのに、この後に大きくこじれるであろう世界情勢　もつとも”裏”の、だが　が整えてくれるかもしれない。その妙な希望だ。

死を悟るから、妙にそういった事を考えてしまうのかもしれないが、それでも、完全な絶望に飲まれて死ぬよりはよかった。

もしかすると、少しでも光を見たいからと思考が極端になっっているだけかもしれないが。

「たははは！　何だ、逃走者のクセに逃げるのを諦めたのか？」

雨音に紛れた足音は、やがて彼らの前で止まる。

たった一挺の拳銃を握る男は、闇の中にその輪郭だけを作つて現れる。声は下卑た笑い声が主であり、彼らのまともな言葉として伝わるものはなかった。

「まあでも……ん、これは転送の反応」

ちやうど逃走者の二人と男を挟んだ間。そこがにわかにも明らくなつたかと思うと、光は膨張し、周囲一帯を瞬く間に眩く輝きで照らし始めた。

雨も、闇も。恐怖も不安も、その全てをかき消す、形容するならばまさに希望の光。その中から、一人の男が現れた。

「つと。ふう、病み上がりなのひでえよな……」

右眼の眼帯を装備<sup>つけ</sup>て、鼻筋を横切る深い傷痕が特徴的な、まだどこか幼さを残す青年。彼は野戦服姿で、肩から負紐<sup>スリング</sup>で狙撃銃を提げる彼はなんでもないようにそう呟いた。

そして不意に現れたのにも関わらず、その全てを理解しているかのように微笑んだ。

「話は聞いたぜ。特異点『エリックス・フィール』。お前を処分しに来た」

「は？ 突然来て何言つてん」

コッキングレバーを引いて弾薬を薬室に装填。

狙撃銃を構え、間もなく発砲。

静寂に響き渡る銃撃音は、寸分の狂いもなく、特異点ゆえにその特異能力で数多の人間を惨殺せしめ畏怖の象徴と成り得たその男の腹を、いとも容易く撃ちぬいた。

「ぐああっ?! て、てめえっ!!」

脇腹を抑えながら跪く。男は先程とは打って変わった殺気こもる視線を青年に向けるが、ソレ以上は何も起こらない。

特異能力を使用するには並々ならぬ集中力が必要。ソレは、どれほどの熟練者でも変わることはないが、熟練者ならばどのような極限の状態でもそれが可能であった。

未熟ならば言わずもがな、少しばかりの障害で、その”無敵”と自画自賛する能力でさえ使えない。

この男は、その後者だった。

「特異点は珍しい。お前を処分するのはオレだって心苦しいがな……協会の手先になったお前の運命はその時点で決した」

至近距離で狙撃銃の銃撃を受けた男は、それだけで致命傷となるから命も残り僅かだ。

だがさらに止めを刺すように、青年は弾丸を込め、引き金に触れた。

「死にたくなければ運命を覆せ。五秒なら待ってやる」

出血量からして五秒以上は、彼自身、集中が保てない。判断し言っではみたが。

喘ぐように呼吸し、やがて倒れこむ。睨むだけで、痛みに堪えるだけで意識がこの青年に集中することはなかった。

口から鮮血を吐き出し、最期に漏らした。

「た、助けてくれ……！」

「あの世で後悔するんだな」  
発砲。

弾丸は鋭く額に叩きこまれ、頭蓋骨が砕ける。どろりとした脳髓が溢れてこぼれ、男の命はそこで絶えた。

青年はそれを見届ける。

背後の二人を一瞥もせず、ポケットから通信端末を取り出し、耳に押し当てた。

「時衛士だ。任務を遂行した」  
ときえいじ

『了解、転送を開始します』

「被害者の命はまだあるが、どうする？ 手追い出し、ここまで連れて機関に戻るるか心配だ」

『連れて帰るなら三秒以内に、彼らの許可をもらってくださいね？』

「わかった。じゃな」

『はい』

衛士は振り返り、座り込む二人へと向き直った。

「という訳だ」

説明など不要だろうというように彼はそう告げる。

同時に彼らも、それだけで意思疎通を果たすように頷いた。

「ありがとう、助かるよ」

「はは、本当にな<sup>まじ</sup>」

疲れきった顔で立ち上がり、よろよろと心もとない不安定な動作で手を伸ばす。握手を求める二人に衛士は応じて、やがて彼らを包む光があった。

時衛士の覚醒は、この日からおよそ一週間程前にまで遡る。



## ブローグ？

「エージ、寒くないの？」

制服姿の姉が、カツプルよろしく腕を組んでそう尋ねた。

衛士は同様の制服を着て、同じ格好の生徒たちが歩んでいく道を共に歩きながら苦笑した。

「姉さんがそうしてくれるおかげでね」  
かえって熱いくらいだ。

頬が、耳まで真っ赤になって熱を孕むのを覚えながら、それでも離れてくれず、あまつさえイタズラっぽく笑う彼女に、敵わないと諦めたのは少し前の話である。

「でも私ももう三年生だけど推薦で大学決まってるし、もっともつとエージで遊んじゃうよ？」

嫌らしい笑み。ただどなぜだか、それがひどく心地良かった。

いつまで経っても弟から離れられない姉。

どこまでもダラダラと続く坂道。見たことも、歩いたこともない道だったが、それを疑問に思うことはなかった。

「あんまダラけてると推薦取り消されんぞ」

「大丈夫よ。学校だと完璧だもん」

「家でも完璧にしといれくれよな」

嘆息混じりに告げてみる。

もうそろそろ、というか普通ならば交際相手の一人くらいいてもおかしくない年齢だ。

彼女の美貌があれば言い寄ってくれる男がいるだろう。そして友人の話だと、実際にそういった相手が出てくることは在るらしい。

が……ダメ……！

断られる……！

圧倒的謝罪っ……！

そもそも「ごめんなさい」と言うより、「無理」と切り捨てるら

しい所を聞くに好きな相手が居るのではないかと思っただ、それさえも無いらしい。

それを聞いて、少しだけ安心する自分に気づいたのは、墓場まで持つていく秘密である。

「よ、エイジ！」

「おはよう、エイジくん」

「おす、トキ！」

そんな頃合いにやってくるのは二人の男子学生と、一人の女子学生。高校生活で苦楽を共にする主なメンバーだ。

名前はそれぞれ。

「おはよう、なんだよみんな揃って、珍しいじゃんか」

名前。

出てこない。

いや、そもそも……顔をあわしているのに、衛士にはその顔が見えていなかった。

のっぺらぼうではなく、影がかかってその奥が見えない。ただ声だけが聞こえた。肩を叩けばそれがわかった。だがそれだけだ。あれほどに仲良く、あれほど楽しいヒビを過ごしたのに、顔もわからない。見えない。記憶に、無い。

それがきっかけになったのかもしれない。

鼓動が、妙に力強く耳に届いたような気がした。

「いやな、ちようどさ」

彼らの声が遠くなる。

自分だけが、孤立してしまったような、妙な感覚。異変はそこから始まった。

体の周りに妙な膜が出来たような、白昼夢の中に迷い込んでしまったような不可思議な感覚。

そして 耳に劈く発砲音。

映画やドラマで聞く『バキューン』なんてものではない、パン、という簡単な破裂音じみたソレ。

それと同時に友人の一人が側頭部に穴を開けて、膝から崩れていた。

衛士はただそれを呆然と見る。姉は悲鳴を押し殺して衛士に抱きつき、残った二人は困惑し、悲鳴を上げながら頭を抱えた。

発砲音。

もう一人の友だちが、同様に頭に穴を開け、血を吹き出しながら倒れていく。

発砲音。

残った一人は胸を撃ち抜かれ、涙を流しながら最期に衛士を見て、口元を動かし、何かを言った。が、聞こえない。鮮明に聞こえる銃撃音、そして近づいてくる足音だけを聞いて、彼女の絶命を見守ることしか彼には出来なかった。

身体が動かなかったのだ。

『エージ！』

かろうじて聞こえた声は、まるで分厚い壁を通して届いているかのようなだった。

後頭部に鈍い衝撃を覚える。

何か硬いもので殴られたようで、視界が揺らぐ。膝の下が消えさってしまっただかのように衛士は立ち続けることができなくなっていた。

為す術もなく倒れる。

その最中に見るのは、妙な男達に連れ去られていく、姉の姿だった。

心電図の反応が忙しない。

あれほど静かだった鼓動がここに来て激しくなっているのを見て、褐色白髪の子はただ困惑した。

医者先ほど呼んだが、僅か一分一秒が長く感じられる。ここで、不意に反応が途切れてしまったら。そんなマイナスの想像が頭の中に染み付いてしまって、彼女はどうしようもなくソワソワと、歯を

かみしめて腕を組み、貧乏揺すりを押さえられずに彼の顔を注視した。

「落ち着けエミリア。こつちまで落ち着かんわ！」

時衛士が眠る寝台、その対面にはプロレスラー顔負けの巨軀を持つ老人が居た。白髪頭をオールバックにする、ただ居るだけで威厳溢れる彼はハーガймと呼ばれる『特異点』だ。

つまりは、今二人に心配されている少年と同じ存在であり、世界抑圧機関の粹を集めた能力者である。

「こ、これが落ち着いていられるかッ！」

「黙れやかましい！ わたしにではなく、むしろだったらエイジに呼びかけてやれエッ！」

「だ、だがわた」

エミリアの言葉をかき消すのは、心臓さえも圧迫するほどの凄まじい威圧だった。

ただの気配。そこから放たれるプレッシャー。目に見えないし、物理的なものでもないソレは、同様にハーガймも感じたようだった。

身体が重くなるのを感じながら彼へと目を配ると、ハーガймはただ頷いた。

「重力子がこの部屋……いや、エイジに集中している」

「重力子が？ アレは、重力を司る素子だろう？」

「同時に特異能力を使用するために切つて離せないものでもある」

重力子は機関が時間操作のために、それを制御する装置を作ったのがきつかけでその存在が解明された。

そして特異点とは、その重力子を肉体に備えて、重力子を制御する能力を持った個体の事である。そこから本能が、その個体の本質的な部分を呼び起こして重力操作、そして特異能力を呼び出し扱う。その過程を無意識に行えるのが特異点だ。

だから、重力子自体が個人にそれほど集中することはない。

それこそ、周囲の人間に、重力異常が感じられるほどに。

「つまり、これは……」

「ああ、機関はとんでもないものを拾ってきたということになるな」  
この現状から考えられることは、時衛士の持つ特異能力がより強力になるという事。あるいは変質し、全く異なる能力を有することになること。あるいは、肉体が堪え切れなくなる事だが 彼の肉体、主に負担となる心臓は生憎にも半分機械だ。それ故に、後者の危惧が実現することが無い。

となれば考えられるのは、特異点としてさらに成長して、敵にも味方にとっても脅威となりうる存在になるという事だった。

重力が二倍になってしまったのかと言うほどに身体が重くなる。立っていられない程というわけではないが、戦闘機のパイロットの気持ちは今なら良くわかった。

その異常なまでの集中が一際強くなった時、まるで地球の束縛が消え失せた。

そう思えるほどに、今度は身体が軽くなった。

空中に浮いているのではないかと錯覚するほどの身軽さ。不意過ぎる現象。忙しない異変。

だがそれを良く味わう暇など、エミリアには無かった。

時衛士の目が開いた。

口を開けて呼吸して、瞳がゆっくりと病室を見回していた。

思わず叫びそうになるのを抑えて、彼女は大きく息を吸い込んだ。  
「ようやく目覚めたか。この寝坊助が」

姉がひん剥かれて輪姦<sup>まわ</sup>されて、四肢を切断されて首を投げられた。胸糞悪くなる、また死にたくなるほどの光景を、永遠と思われるほどの時間、ずっと見ていた。目を瞑ろうとも瞼が言うことを聞かず、身体が動かない。まるで背中におもりでも乗せられているかのようにだったが。

気がつけば白い色を見ていた。

否、それは色だけではない。蛍光灯や、目立たない模様がある。

天井だった。

叫びだしたくなる。

唇が震えて、開いて、糸を引くのを理解しながら、喉の奥からせり上がる悲鳴が、もうあと少して吐き出される。

「ようやく目覚めたか。この寝坊助が」

それを遮ったのは、エミリアのそんな言葉だった。

胸の中で蠢いていた悪感が少しだけ和らぐ。目だけを動かして声のする方を見れば、白髪で片目を隠しているものの、残った目が充血していることが良くわかった。

「……オレは、どれくらい寝ていたんだ？」

「一ヶ月ちよいだ」

ハーガймが答えた。またそちらに目を向ければ、今度はいつもと変わらぬ還暦過ぎの、だが年齢より遙かに若く見える老人の姿があった。

「一ヶ月か。筋力衰えてるな、たぶん」

「安心しろエイジ、お前の為のトレーニングは既に考えてある。だろっ、ハーガйм？」

「ああ、時間が許す限りお前を鍛える。その準備は万全だ」

「そうか。良かった」

そう、良かった。

これでまた元に戻る。否、戻っただけではダメだ。もっと先、誰も敵わぬくらいにもっと強く。

あの悲劇を繰り返してはいけない。

あの惨劇を許してはいけない。

復讐だ。

恨みが恨みを呼んでもいい。惨劇が惨劇を繰り返してもいい。

元々はこの私情のためにこの機関に来たんだ。

奴らを、協会を潰す。この生命に変えても。

衛士は半身を起こす。ともに一切の痛みや障害が無いことを確認してから、四肢、そして胸にいくつも付けられる電極を引き剥

がして床に捨てた。

寝台から降りて久しぶりに立ち上がる。ただ降りて立つだけでよ  
ろけてしまう己に、それだけの衰弱や衰えを覚えながら、点滴針を  
引きぬいた。

「ハーガймさん、今から頼めるか？」

「今から？ 無理だ、医者に見てもらわないと……」

「点滴に心電図。もっと具合が悪いならこれだけじゃ済まない筈だ。  
なら残るのはただの確認。今のオレにはそれすら惜しいんだ」

「おい、エイジお前……」

その背後でエミリアが口を挟む。が、それを制するのはハーガイ  
ムだった。

言っても無駄だと首を振る。エミリアはそれで理解し、肩を落と  
した。

「好きにしろ」

「ごめんなさい、エミリアさん」

「いや、いい。起きてくれただけで、それだけでな」

振り返らずに衛士は言って、

「なら来い、時衛士。だが少しでも異変があれば迷わず病院に搬送  
するからな」

「構いません」

強い意思を持つ眼光。

まるでどこかで決意をしてきたかのような、迷いのない瞳。そし  
て今までの時衛士とは違う妙な違和感。

別人のような彼は、それでもあの少年としてハーガймを見つめ  
る。

かくして、殆ど寝起きで訓練が開始して       。

ハーガйм曰く”地獄の一週間”が経過し、現在に至る。

時衛士はさしたる事情も知らずに特異点を始末して尚、その被害  
者二人を連れ帰るといふ、ごく難易度の高い任務を僅か数分で片付

けるという偉業を成し遂げて、機関にてようやく”復活”した。



## 蝕む闇

「他に仕事は無いのか？」

連れ帰った二人の被害者のために病院の手配を機関に任せて、衛士は帰ってきたばかりだというのにそう急かしていた。

世界を掌握しようとする機関。

純粹にそれを妨害する協会。

それらの行動が活発化するのを肌を感じているのか、それとも単に彼自身が高ぶっているのかは分からないが、その一面は今まで彼には無かったものだった。

飽くまで八方美人に生きてきた彼だし、それが時衛士の処世術だと思っていた。

この機関の技術全てを支える、開発技術部部長のアイリンは、その長い赤毛を掻き上げながら彼へと向き直る。

「少し休みなさい。いくらなんでも、君が疲れに気づいてなくてもコレ以上の活動は危険よ」

一週間の訓練は、一日十八時間の、それこそ肉体を破壊する勢いで行われた特訓だった。全力を尽くすアスレチックワールドに、ハーガймとの組手。そして狙撃訓練に、精神訓練。模擬訓練。それらを一日で消化し、六時間の休憩の後にまた繰り返す。悪夢のような時間だ。

だというのに、時衛士はそれをやりこなした。

いくら心臓が人工的なものとはいえ、精神的にも、そして単純に肉体的にも堪え切れぬはずの運動量だったはずだ。ハーガймだつて組手の時点で音を上げると思ったからこそ、無茶に無茶を重ねたメニューを組み立てたのだ。

少し弱音を吐けば、鬼軍曹の暴言をまき散らしながらも少しだけ軽減するつもりだった。だというのに彼はこの一週間を乗り越えて大した休憩もないまま、その裏切り者の抹殺任務に就いていた。

疲れなど知らない子供のようだ。それまで眠っていた一ヶ月を取り返すような働きは凄まじいほどだったが、そう思うと同時に、酷く心配だった。

まるで死にに急いでいる。

彼女には、そう思えて仕方がなかった。

「オレの身体はオレがよく知っている。もっとオレを任務につかせてくれ！」

「あーうつさい。貴方に出来る任務はもう無いの。おとなしく自宅で待機してなさい」

「だからオレは――」

「いい加減になさいッ！」

アイリンが叫ぶ。研究室で、それぞれパソコンに向かっていた研究員が総じてその動きを止めた。

空間が、不意に静まり返る。彼女は立ち上がり、呆然とする衛士へと対峙した。

「貴方自身が疲れを知らなくたってね、疲労は肉体に蓄積されていくものよ。休憩を置かなければなおさらで、増加する一方。いつ倒れてもおかしくなくなる。今は疲れてないって思ってるでしょ？」

それはね、エンドルフィンっていう脳内麻薬がごまかしてるだけなのよ。そんなに任務が欲しいのなら命令してあげるわ。休憩なさい。それが今の貴方の任務しごくとくよ！」

「くっ……！」

「貴方はもう、貴方一人だけの命じゃない。機関に道具として使われてるけれど、貴方を信頼する人もたくさんいるわ。その人達のために、少しでもいいから自分を大切になさい。いいわね？」

「わかったよ。休めばいいんだろ」

「全然わかってないみたいだけど、そのとおりよ」

「任務が決まり次第呼んでくれ」

「わかったわ。出来る限り早く見つけておく」

狙撃銃を負紐で肩から下げたまま、彼は研究施設を後にする。

彼女はその姿を、背中を見送りながら、妙な感覚を胸に渦巻かせていた。

これほどまで叫んだのは久しぶりだった。それと同時に、自分の事以外をこれほどまでに想ったのも随分と久しぶりだった。

そして、またその想いが届かないやるせなさ、切なさを感じるのも懐かしいと思える程だった。

いや、もしかすると初めてかもしれない。昔に呼んだ小説を、自分の限りなく薄い過去の思い出を、それで埋めているが為だろう。

少しだけ虚しくなるが、それで分かった。

どうやら、時衛士を利用してゐる間に、自分自身も随分感情移入してしまつたようだ、ということに。

少年は荒れていた。

どうしようもなく胸の中で渦巻く負の感情が行き場をなくしていた。

殺戮衝動は無いが、その感情をぶち撒ける為の手段としてそれが選ばれるのに、そう時間はかからなかった。

目覚めてから芽生えていたその想い。それまでは己を壊す程の運動量で耐え忍んできた。これが終われば恨みを返せるからと自分で自分を励ましてきた。寝ても悪夢で心が休まらず、その悪夢での怒りを糧にして身体を動かした。

そしてようやく、自分と同じ”運命に選ばれた”特異点が裏切り行為をしたという事で殺してきたが たったそれだけで、彼が満たされるはずがない。

もっと殺さなければいけない。

姉の仇だ。家族の仇だ。

殲滅しろ。抹殺しろ。

心の闇でもなんでも無い、時衛士の理性がそう囁いていた。

自分を保つためにすべきこと。しなければならぬこと。

長い眠りから覚めて、まともに合っていない知り合いが多かった

が、今ではもう気にならなかった。

どうでもいい。

仕事が決まるまで、あの悪夢を見続けるだけだ。

「え、エイジさん！」

人波を無意識にかき分けて自宅へと向かう。

その中で、彼の名を呼ぶ声があった。背後から、その気配と共に近づいてくるソレに覚えはあった。

ミシエル。彼女の名前は確かそうだった。

「エイジさん、帰宅中ですか？」

彼女はそう多くもない人を避けて、やがて彼の隣に並ぶ。自然に、距離を縮めて手と手が触れ合う距離に近づいた。

それから顔を見て　くつきりと浮かび上がる目の下のクマを、そしてげっそりとコケた頬を、青白い顔を見て思わず息を飲んだ。

彼は時衛士。間違いなく、記憶と合致する同一人物だ。

だが今隣に居るその時衛士は一体誰なのだろうか。妙な疑問が浮かぶほど、彼の姿は別人のようになっていた。

「ああ。命令だからな」

そっけない、無骨な返答。愛嬌も熱すら一切ない、事務的な言葉だ。

「な、なら一緒に帰りませんか？ 私、部屋隣なんですよ」

「ああ、そうだな」

それでもミシエルは言葉を続けた。

アイリンに言われたからではないが、今の彼を見れば誰だって心配になる。

それまでであったにわかなな下心なんかは既に消え失せていて、今ではすっかり、帰ったら栄養のつくものをたくさん食べさせなくちゃ、だなんて事を考えていた。

虚空を見つめて、ただの一瞥すらしない少年。微笑を忘れた、機械のような顔。

平凡な少年は平凡な人生を崩壊させられ、絶望し、力を得てまた

新たな人生を歩み始めた。だがこの間の死をきっかけにし、彼は殺戮<sup>キリ</sup>機械に生まれ変わってしまったようだった。

これがもしマンガや小説ならば、心を与える事でより強くなり、人間的にも成長する。ミシエルは、彼ならばそうなると確信していた。

だが、心とはなんだ。どうやって心を与えれば良いのだろうか。ただ人の暖かさを教えられるのか。抱きしめれば、愛を伝えられるのだろうか。

わからない。わかるはずもない。

時衛士の中にある途方も無い絶望という深淵を埋める程の物を、その深さを知る術も、同調するための経験すらも彼女は持ちあわせては居ないのだから。

「ねえ、エイジさん……」

声を掛けても返事がない。

促す所作も無い。

彼女は続ける。

「私と初めて会った時の事、覚えてますか？」

「ああ」

反応。

無視ではなかった。

それだけでも嬉しくなる自分がすこし情けなくなりながらも、繋ぎ止めるように頷き、言葉を繋げる。

「あの時のエイジさん、ずっと私の胸ばかり見てましたよね？ 平然としてたけど、すごい恥ずかしかったんですよ？」

「そうか」

「そうですよ。それでエイジさん、あれからずっと頑張ってきたよ。たね。そのお陰で、機関<sup>キョウ</sup>の雰囲気も随分変わって来ました。付焼刃<sup>ヒヤク</sup>という能力者がすごく強くて、機関でもどうしようってなつたのに、エイジさんはそれでも構わず戦って……」

「そういった任務だ。オレはせめて任務は達成する」

「でも中々できませんよ。自分より強いってわかってる敵を相手にするなんて」

そして思い出す。

彼の健闘。負傷。勝利。敗北。そして 死。

それらがあつて初めて今の彼がある。

それが良いことなのかは分からない。だがその過去が一つでも失われては、彼は彼でなくなる。

ミシエルは思いながら、そつと彼の手を握った。

何気なく甲に触れたのをきっかけに、一方的に繋いだ手。力を握つてもソレは帰って来なかったが、拒否されるとばかり思っていたから、それは大きな一歩だった。

彼の体温が伝わってくる。脈拍が、その手の感触がよくわかる。

「あの時みたい添い寝、しましうか？」

甘く、優しい囁き。

野戦服越しに伝わる体温。柔らかさ。

髪からただよう石鹸の香り。

そして蘇る記憶は 大切な人を失った、あの瞬間のソレだった。  
「く、うつつ……ッ!!」

あの連中の顔が蘇る。

この間、その協会なかの一人が死んだ。

だがまだ、ザコのクセに粹がるクソ共が四九人残っている。あの数だけで、それでも少年がそれぞれの顔を忘れたことはなかった。記憶力が凄まじいという事もそうだが、それよりも何よりもそうさせるのが執念だ。

忘れてはいけない。復讐それが達成されるまで、決して。

頭を抱えて立ち止まる衛士は、そのどうしようもなく溢れてくる力を必死に抑えていた。

今少しでも気を抜けば関係ない人間を殺してしまう。

もしそうしてしまえば、自分の中の大切な、唯一残っている大切

な何かが壊れてしまう気がした。

だから抑えなければならぬ。

跪き、額を地面に擦り付ける。

周囲の人間が彼らを避けながら、遠目にクスクス囁き笑い、不快感を催していた。

「クソ……ぐううううっ！」

目をつぶれば、奴らの顔が脳裏によぎる。

堪え切れない。

衛士は腕を振り上げる。ミシエルが必死に名前を呼んでいるが、それに応える余裕はない。

「あああああっ！」

振り下ろす。

大地を叩く拳骨。骨に衝撃が直接伝わってきて、腕が痺れた。

遠慮のない打撃に皮膚が裂け、拳に血がにじむ。だというのに痛みは鈍感で、彼は渾身を込めた筈なのに傷ひとつつかない地面にイラついた。

「くそ、くそ、くそおおおっ!!」

何度も、何度も地面を殴る。叩く。打ちのめす。

傷つくのは一方的に自分だけだというのが分かっているのに、どうしてもそれを止められなかった。

狂っている。

自分でもよくわかる。

何かが壊れてしまったようだ。

それは随分と前の話だ。

ただ、未熟だった自分はそれを誤魔化して気付かないふりをしただけ。

今は無防備故に、直接つきつけられたそれを真に受けて、本来すべきだった行動に移っているだけだ。

協会を殺す。

それが最優先事項であり、それ以下は全て切り捨て。

復讐こそが今の彼の全てであり、最後の役目となりうるものだった。

果たして自傷行為は、彼の意識が途絶えるまで行われた。

だが傷は思ったよりも軽傷に済んでいた。それは残った理性が力にリミッターをかけた為だろう。

少年はそれから丸々二日、四十八時間の眠りにつく。

機関は、そんな少年のあまりに自暴自棄すぎる行いにやや雰囲気  
を暗がりに落としたが……。

そこでアイリンはまるで誘われるように発見した。

ただの一般人　とはいえ、傭兵だ　が、付焼刃スケアクロウを相手にした  
という情報を。

そして個人だというのに一方的な戦闘でソレを終わらせたという  
事を。

新たな出会い。

それが何を起こすか分からない。

だが、この状況を打破するためにはなくてはならないものだと、  
彼女の直感はそう告げていた。



## 対話

「傭兵？ P M Cか？」

仕事の時と、眠る時と、起きた時と変わらぬ迷彩服姿で、時衛士はアイリンの前に居た。

施設内の食堂で、皆が昼食をとっている風景に溶け込んで話し合う。それぞれの前には空になった井がひとつずつ。食後の歓談だが、両者にとってはそれが本題だった。

服装にも気を使わなくなった。ミシエルのお陰でいくらか血色が良くなっているが、それだけが唯一の救いだろう。あとは単純に、筋力などの身体能力は変わっていないのに強くなったように思う。

迷いがなくなったというのだろうか。

そして慣れた。

自分の戦い方に、自分の能力を上手く組み込めてある。彼の能力は予知であり、それは常に彼の脳みそに”未来の情報”を与えているのだ。それと同時に、現在進行中の情報を得る。二つのそれらを処理して尚利用する。一時的ならばいくらでもできるが、これが死ぬまで続くとなれば頭が痛くなる話だ。アイリンはイメージし思わず頭を抱える。

「どうした」

「いえ、なんでもないわ。そう、傭兵の話だったわね。彼はP M Cじゃないし、そういった会社や組織に属していない。個人でどちらかについて、働いて、報酬を得て、またどこかへ行く。そんな生活を繰り返しているみたい」

「命知らずの変人だな。戦闘で飯を食うなら集団のほうがまだ安全なのに」

「貴方が言える立場じゃないでしょ？」

知るか、と捨てるように衛士はコップの水を煽るように飲み干し

た。

やはり以前より変わっている。アイリンは改めてそう思う。

何よりも思いやりや、気遣いや、他者に向けるそういったものが一切なくなっただ。

少し寂しい気がした。

いや、この衛士不在の二日間で再認識した感情は、そんなしおらしくいい年して乙女チックなものではなかった。

少しつまらなくなった、というのが正確であることを理解したのはついこの間で、その事に虚しさを覚えた時などは寝込みたくなるほど落ち込んだ。

「ところで、さっきの食事の味はどうだった？」

話を变えてみる。

重要な話は確かに続けるほうが良いが、確かめて置きたいことがあるから食事に誘ったのだ。外食なんて柄じゃないから食堂での食事だが、別にあこがれの男性と、というわけではないのだ。気にする必要など無い。

「……普通だ。いつもの牛丼の味だった」

疑問に首を傾げるが、それでも衛士は不意の問いに何かを察したらしい。

彼は親切にそこから続けた。

「アイリンさんはいつもの、白い肌に、赤い髪でいつも通りに見えるし、認知機能がどうかしたという変化は無い。安心してくれ」

「そう。なら良かったけど」

「オレが変わったように見えるんだろうが、これが本来のオレだ。繰り返すようだが……」

「いいわ。耳にたこができるくらい聞いた話は」

「そうか」

感慨もなく、残念そうでもなく、彼は頷いた。

「貴方、誕生日はいつだったかしら？」

「誕生日？ ……二月の……、中旬だ」

何か考えがあつて訊いたのであろうアイリンに答えてやる。が、月は思い出せても正確な日数が思い出せない。十日だった気もするし、よく考えれば二十日だった気もする。間を取って、なんて誕生日を教えるにあたつて明らかにおかしい返答だ。

「そう。じゃあ貴方は当分十七歳なわけね」

「そうだ」

「仮に、貴方が眠っていた時間が一ヶ月じゃなくて、一年や二年だったらどうする？」

「どうもしない」

一拍もおかず、彼は即答した。

「協会が動いていないならオレは潰すだけだし、機関がまだ機関として存在しているなら働くだけだ。どれだけ時が経とうとも、状況が変わらなければオレの役目も変わらない」

その通りだ、と勢いで質問したアイリンが頷いた。

それで、と衛士が問う。その後の言葉はないが、本題のことを指しているのだということは良くわかった。

それが今の”彼らしさ”ならば、もはやなにも言うまい。

「ごめんなさい。話を戻すわ」

その傭兵、『レックス・アームストロング』の情報は割と簡単に手に入つた。

彼はアメリカ人で、アメリカで生まれ育つ。ハイスクールを卒業した後海兵隊に入隊し、その後一等兵として様々な紛争に参加する。趣味の狩猟が良い方向に活躍し、その周囲への注意力や警戒、反応判断はすこぶる調子で成長し、九ヶ月目、上等兵へ昇進する前に除隊。

理由は一般市民の殺害による現行犯逮捕。その後留置所から脱走し、行方不明に。

その後様々な民間軍事会社を転々としながら、一時期はフランス外人部隊に身を置いたこともあった。が、今では個人活動の傭兵だ。そして名もある程度広がるほどに有名で、有能な傭兵だ。

傭兵という稼業はただの筋肉馬鹿では務まらない仕事だ。

あらゆる環境に適応し、あらゆる作戦を随時状況により変更して、そして無駄なく行動し限りなく自分に利己的でなければ生きていけない。ある種の野性味を、そして野生で生きるすべての知恵を持たなければならぬ仕事だ。つまり、普通の頭の出来でここまで名を広める事は殆ど不可能と言えよう。

そして普通の頭の出来で、超能力なんてモノを使用する敵を撃破することはできないはずだ。

初見殺し。生き残っても、追い打ちを掛けられるだろう。

だが、付焼刃スケアクロウという存在を初めて知っても尚生き残った例外は機関にも居た。

それは目の前の少年だ。

その能力は風を起こして弾丸を弾く程度のものだったが、それだけでも十分に脅威になり得たはずだった。だが彼は生きている。あまつさえ、その敵を皆殺しにしていた。

その点は似ている。

秘めたる才能というのだろうか。アイリンにはよく分からないが、直感的にそう思った。

「能力持ちではないんだろう？」

「ええ。現在観測した限りではその様子はないわ。それに、仮に能力を持っているとしたら特異点以外に考えられないし。付焼刃は、協会の特別な施術があつて初めて能力が使えるっていうのは、知つてたかしら？」

「どうでもいい」

それは質問に対する答えではなかった。

どうでもいい。たしかにその通りだ。どのみち殺す相手だ。特殊な能力を持っていたとしても、それはただ殺害の障害になるだけ。どうやって力を手に入れた過程なんて関係ないし、幼子が居るから見逃してくれ、なんて命乞いも彼には通じないだろう。

だからなんだ、と切り捨てられるに百万でも一千万でも賭けられ

た。

「それで？ オレはそのレックス・アームストロングをどうすればいい。聞く限りじゃ敵にも味方にもなるんだろ？ 殺すのか。そうやって何でも殺せばいいと思って。無害な人間に、オレは手を出さないぞ」

「でも彼が協会側に回ったら？」

「殺すさ。何を言っているんです」

「……貴方、もしかしてふざけてない？」

言われて、嘲笑じみた笑いを漏らした。蔑む形でも、見下す形でも、彼の口角が上がるのを見たのは久しぶりのことだった。

「一応まとめておこう。オレは協会の人間以外殺さない。それだけだ」

「じゃあ無関係な人を殺さざるを得ない状況になったら？」

「より協会の人間を逃さないように殺して、殺す」

「……なんだか貴方と話していると気分が滅入るわ」

「殺すだの殺さないだの話ししかないからでしょう？」

不安定に、彼は思い出したように敬語を口にする。

アイリンは肩をすくめて話題を転換した。

「オレだって、突然こんな本能的な部分しか考えられなくて混乱したが、今ではようやく慣れてきた。大丈夫だ。ユーモア豊かに会話できる」

それこそが冗談なのではないかと思えてしまうのが、悲しいところだった。

アイリンはコップの水を口に、喉を少しだけ潤してから言葉を返した。

「なら仕事以外の事を考えられるかしら？」

「くっ……！」

「出来れば詰まらない欲しいんだけどねえ」

妙な事で落胆するように彼はうつむいた。

つまらないというのは訂正しよう。少しは面白いかもしれない。

アイリンはまたいつものような微笑みを取り戻して、彼の傾向も随分とわかったことだし、と重い腰を持ち上げた。

「ねえ、貴方のもつ予知って能力は」

食い気味に、というよりは殆ど遮るように衛士は言った。

内容すら述べていないその台詞に対して、ごく正確に。

「アイリンさんが」言った”という未来を知りながら、オレはアイリンさんが何も”言っていない”現在を過ごすだけです。ですが基本的に予知できるのは確実に起こる事です。今述べた仮定は決してありえません」

彼女が尋ねようとしたこと。

ソレは、アイリンが訊ねるという事が決定した未来を予知した瞬間に、それを反故にして何も口にしなかった場合はどうなるか、ということである。

そしてその返答は彼が言ったとおりである。

予知は予測ではない。時系列的に起こっていないことを知る能力ではあるが、彼の能力に至ってはより確実性が高まるソレだ。己の行動については少し”融通”が利くらしいが、他者の場合はありえないらしい。

つまり、起こる事を予知したら、その起こる事は確実に起こるのである。他者の意思でそれを覆すことはできないが、その起こるという未来を、運命を変えられるのは予知が出来る人間のみ。つまりはこの少年だ。

「それで、貴方は目覚めてからその能力に異変はないのかしら」

死を垣間見た人間の性格が変わることは、割と一般的かもしれない。い。

そしてまた、一度死を見た人間の力、特にそういった本来持たざる超常的な特異能力は特に強化される傾向がある。

彼ならそれが顕著であるはずだ。彼女はそう信じていた。

「ありませんよ。予知に遠隔視、透視……他に増えたら、いい加減オレの頭では処理しきれなくなりまし」

「予知の時間は？」

「五秒間の未来です」

「遠隔視の範囲は」

「オレを中心に上下左右半径十メートルほど」

「透視は」

「特に。変わらずオレが透視したものは透過したものとして干渉できるのですが」

返答全てに虚偽を放つ衛士は、それでもしれっとした態度で、テーブルの上で指を絡めるように組んで、アイリンを見据えていた。満足か？　とでも言いたげな表情は、先ほどの少しばかり軽くなった雰囲気を再び重くしてくれる。まったくもって忙しい奴だと言つてやりたい気分だったが、彼女の理性がそれを飲み込ませた。

予知は五分先の未来。

遠隔視は上空、雲の中までだからおよそ五キロ前後だ。

だから、この地下空間ジョフロントに居ながらも地上を見ることが出来た。必要がないから滅多には使わないし、負担が高く、変わらず集中の限界は五分で来た。だからソレが可能な右眼はいつでも眼帯で、適当で簡単に封印してある。

唯一真実に近いのは透視だ。

今までは透視は念じることによって遠隔視と切り替えられた。まるでゲームの、サブウェポンのようだと思ったが　今では全ての眼、その能力に干渉した。

遠隔視が使えない代わりに透視をする。それが今までだったが、今では透視を使いながら遠隔視が使える。

使い方は様々で、使いこなすにしても衛士自身に強い疲労をもたらすものばかりだった。

アイリンが嘘を見抜いているかは知らない。だがそれがどうであれ、関係のない話だった。

彼女は立ち上がったまま、捨て台詞のように言った。

「任務の説明は明日するわ。今日はありがとう。帰って休みなさい」

## 任務：傭兵『レックス・アームストロング』と交渉せよ

十二月十二日。

時衛士はロシアの首都モスクワに転送<sup>トバ</sup>された。

任務の為である。その内容は、例の傭兵と接触し、交渉して引き入れる、あるいは協力体制を構築<sup>つく</sup>すること。

黒いハイネックの上に白のトレンチコートを着こむ彼は、さらにギターケースを背負っている。中には簡単に分解されたM700と呼ばれる狙撃銃と、無数の弾薬。コートに内装されるホルスターには9mm拳銃だ。

装備はそれだけで、彼は着の身着のままここに来ている。ひとまず長居をするつもりはないから日本円にして十万円ほどを持っていたが、ソレ以外の荷物は装備だけである。

「寒いな……」

今日は協会の殲滅任務ではない。それゆえに少しばかり気怠さがあつたが、今ではそれも気にならない。

途方もなく幅広い道。そこは常に濡れて、濃いグレーに染まる。それ以外の地面には雪がつもり、往来はみな頬や鼻頭を赤くして居る者ばかりだが、本格的な防寒具ばかりを身につけていることに驚くと同時に、やはりな、と納得した。

毛皮のコートに、耳までを覆う帽子を被る面々。いくら昼日中とはいえ、いくら日が出ているとはいえ、東京十二月の早朝より遙かに寒い。やはり慣れなのか、と衛士は思う。

「しかしまあ、平和だな」

ロシアは治安が悪いと思っていた。少なくとも下手に行動すれば日本より物騒な場所ではあるかもしれないが、それでも早々人柄の悪そうな男達に絡まれることはなさそうだった。

歩いていると、彼は自然的に『赤の広場』に来ていた。

途方もなく広大な広場だ。円形に広がるのではなく北西から南東



に長く広がる。大聖堂や塔などが遠目に見える世界遺産の一つ。仕事ついでに観光も、と考えていたが、やはりこういった景色は良いものだ。

衛士は頷きながらも、いい加減寒さに堪えてきた。頭が冷えて耳が痛い。ブーツのお陰で足はまだ平気だが、このまま外に居たらまるで雪山に遭難した気分になってしまふ。

そもそも、傭兵のような人間がこんな広場ひろばに居るのだろうか。

観光か、地元住民か。割合に広場には多くの人間が居るが、その中には青い都市迷彩を着る警備兵なのか、軍人なのかよく分からない連中が散っていた。

下手に関わるとまた面倒そうだ。

彼はそう考えて、足早にそこを後にする。

衛士は手のひらサイズの通信端末、携帯電話のようなそれを捜査し、回線を繋げる。

通信衛星を介して行われる地下空間ジオフロントに繋がるが、都内で友人に電話をする程に快適な通話を楽しめる。これも全て機関の技術力の賜物だ。

「こちら時衛士、今、大丈夫か？」

「いつでも大丈夫です。後方支援バックアップは任せてください」

ミシエルはあれから、専属のオペレーターになっていた。

元々前線には出ず、機関にこもって通信援助やら何やらが主な業務内容だった彼女である。衛士の専属になったことで、下手に休みをとることも出来ずに疲弊が募る。あまり負担をさせずに速やかに帰還するのが、今回の目的でもあった。

「例の目標が何処に潜んでいるかわかるか？」

「いえ……中肉中背で黒髪、赤眼で、それ以外で特に目立った外見的特徴はありません。ただ、モスクワに居るといふ事は間違いないようです。エイジさんなら、あるいは向こうがエイジさんの雰囲気を感じて近づいてくるかもしれません」

「類友つてやつか。しかし共通点なんてカケラも無いだろうに、期待薄だな」

『傭兵といっても、現在ロシアでの仕事はあまりありません。東のほうから来たところを見るに、恐らく北欧あるいは東欧の移動中かもしれません』

「なるほど。ならここで宿をとっているかもしれないって訳か」

外で待ち伏せていたほうがいいだろうが、それは自殺行為だ。寒さに慣れていないのに、何の対策も無しに夜を明かしでもしてみれば、翌朝には冷たくなっていることうけ合いである。

しかし この広大な街で、特別目立った様子もない格好の男一人を探すなんて、無謀だと改めて思った。

「まあ、虱潰しでもしてみる。じゃあ、またな」

『はいっ！ が、がんばってくださいね』

「おう」

通信が切れる。

衛士は端末をポケットに入れると、近場の外套を背にして立って、あたりを見渡した。

地元民が楽しげに話しながら歩いていたり、あるいは犬を散歩している婦人や男性なども居る。スキットルを口に運びウィスキーを煽る中年男性は、日常風景のように紛れ込んでいる。が、それは確かに紛れも無く日常風景なのだろう。確かにこう寒くては、体温を上げなければ寒くて仕方が無いものだ。

白く染まる息を吐き捨てながら、少しだけ呆然とする。

手がかりの無い探し人がこれほどまで面倒だとは思わなかった。

「おう兄ちゃん<sup>あん</sup>」

そんな折に声をかけてきた男が居た。

声の方に首を回すと、隣に立つのは頭が白くなり始める年齢の老人だった。コートを着て襟を立てる、どこにでも居そうな男である。「ギター弾けるのか？」

「あ、いや。これ預かり物なんで、手をつけられなくて」

「模範的な回答だな。下手に弦が切れてるだの弾けないだのと答えていれば、そのケースの中身を見せるだの貸してみるだの言われる可能性が生まれるからな」

「……ちよつと、何言ってるかわかんないっすね」

飽くまで老人の目を見て首を傾げて、最近の若者らしく彼を嘲笑するように言ってみる。

「はっ」

が、彼はそれを一笑。

突き詰めるように大きな一歩で歩み寄った。

「まだ若く見えるが、キミは軍人だろう？ 潜入し単独行動で何かをしでかしにきた日本人だ。日本人に限ってこういう事は無いと思っっていたがね」

「いや、軍人じゃないですよ。まだ十七ですし。日本は自衛隊しかないですし」

「聞いたことがある。軍とは何が違うんだ？」

「単純に防衛を目的とした組織ってだけです」

「そういうものか。ならキミがその自衛隊員であつたとするならば説明がつかないな。だが銃を持ち歩いているキミは何者だ？」

「ら、ライセンスを申請していますので」

「ヤケになるな。何もキミを警察に突き出そうとか、そういう訳じゃない。ただ純粹に、ボクに危害を加える敵かな、と思っただけさ」  
口調は、まるでバラバラのトランプを整えていくように丁寧になつていく。老人の背筋は、徐々にすつと伸びてやがて目線が同じ高さになった。

「何か探しものかい？」

最終的に、声は穏やかに、若者のソレになる。  
変装しているのだと衛士はそこで気がついた。

顔にはシリコンマスクを、恐らく白髪が混じる髪はウィッグかスプレーだろう。なかなか手の込んだ格好だ。探偵か何かなのだろうか。

「ええ、ちよつと人を。あんたは地元の人？」

「いや、ボクはちよつと観光にね。ホテルをとって、今日はそろそろ帰ろうかと。思いの外寒くてね」

「ですよ。いや、日本人に堪えますよ。コート着てもすげえ寒いんですから」

「ボクはアメリカだからね。十分共感できるよ」

身を抱くように彼は身震いしてみせる。

衛士はそれに軽く笑ってやると、彼は手を伸ばしてきた。

「キミは良い人そう。街に居る間でも仲良くしてくれると嬉しい。後一、三日くらいしか居ないしね」

手を返し、握る。軽い握手を交わしながら衛士は言葉を返した。

「ああ、そっちさえ良ければ。でも、世界一周旅行中か何かスか？」

「ま、似たようなものかな……と、もう気づいてると思うけど、この顔マスクなんだよね」

言いながら、男は上向いて顎の皮膚を指でこすり始めた。すると皮膚らしきモノがべりりとめくれ、彼はそこに指を強引に潜りこませるように摘む。引っ張り上げて掴むと、そのままシリコンを顔面から引き剥がしていく。

毛髪は果たしてウィッグだった。

シリコンマスクと一緒に髪の下には、闇のように黒いソレがあらわになる。灰色の瞳の下には、燃えるような紅い瞳があった。まだ若い男の顔、その頬には擦り傷のような薄い傷痕があるだけの、優男風味の甘いマスクだが、嫌味にならない、好感の持てる顔だった。

衛士の息がにわかに詰まる。

その刹那に、男はコートを翻したと思うと即座に内ポケットからナイフを抜いた。

深く踏み込み、折り曲げた人差し指を喉仏に押し付けるようにして刃を首に突きつける。

男の眼光は、先ほどの穏やかなものとは一転していた。

「どうした、ボクの顔に何か見覚えがあるのかい？」

レックス・アームストロングは、衛士のほんの僅かな動揺を見逃さなかった。

それは恐らく、あまりに小さすぎるものの、疑念、疑惑として最初から存在していたもののなのだろう。だからソレを確信に変えるためにわざわざ接触したのだ。そしてなかなか化けの皮を剥がさない衛士に、最終手段として顔を見せた。

反射的にコートの下に腕を忍ばせたが間に合わない。死ぬ前に拳銃で仕留められるかもしれないが、首を切り裂かれた時点で死が決定する。

選択肢は全てが潰えていた。

もういい、そもそも探す手間が省けたただけだ。隠す必要は一切ない。ここで心証を悪くする意味はないのだ。

「レックス・アームストロング、オレはあんたを探していた……！」

「キミは何者だ。まず名乗れ。ボクをどこまで知っているんだ？」

「あ、ああ…… オレは時衛士。世界抑圧機関から来た。あんたは大変有能な傭兵だということくらいしか知らん」

「世界抑圧……？ なにか、マンガが何かに出てきそうだ。冗談か、と言いたところだがな。ボクに襲いかかってきた”妙な連中”が口にしていたのに覚えがある。機関がどうのこうのって言っていた」

何やら納得したようにレックスは唸るが、それでも首に食い込ませる力は緩めない。完全なる身の安全や、心の底から納得がいくような説明がなければ彼は離れてくれないだろう。

「ああ、その機関だ。機関は世界掌握を企てていて、あんたを襲ったその”妙な『能力』を持つ連中”はオレたちの敵だ」

「ほう、なるほどな。どうやらあながち嘘ではないようだ」

「そうだ嘘じゃない。オレたちはあんたのその働きぶりを見て、勧誘しにきた。それがダメなら、協力してくれるという姿勢を見せてくれるだけでもいい」

「たかが個人を？ たった一人が入るだけでどうにかなってしまっ

組織なのか？」

「オレたちは軍じゃない。戦闘員は居るが、まともに戦争なんてしないし、あんたが今までしてきたような戦闘は一切ない。個人と個人がCQCをかましあうような戦闘だ。そもそも敵が常に範囲攻撃をしてくるような連中ばっかだから、あんたの世界での常識で戦うと痛い目に遭う……っていうのは知ってるよな」

知っているはずだ。

その戦闘を行ったという情報は聞いている。

その上で生きているから、有用性が高いという事で勧誘しろと命令しているのだろう。

「まあ確かに。あんな連中とばかり戦っているんだとしたら、同情するよ」

「な、なら」

「話は後だ。ここだと目立ちすぎる」

ある程度の信頼が得られたのだろうか。

レックスはナイフごと腕を引き剥がし、すかさずコートの中へとそれを収める。衛士もコートのボタンを閉めて、大きく息を吐いた。蒸気のようなそれが空気に流れ、やがて溶けていく。

彼は先ほどと同じような距離で対峙し、肩をすくめた。

「キミ、行く所があるのかい？」

「いや。ついさっき来たところでね」

「ならウチに来るといい。信用するにしろしないにしろ、少しだけ興味が湧いた」

任務：傭兵『レックス・アームストロング』と交渉せよ？

入って右手側のユニットバス。短い廊下を挟んだ寝室兼居間には、カウンターの付いた台所があつて、その壁際に寝台を置き、窓際に小さなテーブルを配置してあつた。それだけの質素な部屋だが、少なくとも外よりは上等であり、空調からの熱風が常に部屋を温めていた。

衛士はコートをテーブルの椅子に掛け、ギターケースを壁に立てかける。遠慮無く腰をかけると、台所からコーヒーが注がれたカップを二つ手にするレックスがやってきた。

「砂糖は入れるかい？」

「いや、どギツイブラックで大丈夫だ」

「じゃあこれ。口にあえばいいけど」

衛士の前に、焦げた灰から抽出したように深い茶系の液体が並々注がれたカップが置かれた。レックスが腰をかけるのを見ながらそれを手に取り、口へと運ぶ。皮膚が火傷しそうなそれを唇につけて

”視た” 未来に己の生存を認識し、口に含む。

毒は入っていないようだ。

「ああ、美味しいですよ」

舌にこびりつくような苦さが残る。後味も何も、感想が苦い以外しか残らないソレは、されど身体を温める。同時に眠気が走る頭も冴えてきた。

これで風呂にでも入れれば完璧だ。

それで、と衛士は大きく息を吐いた。

ぬくぬくと温かい空気に触れながら、気が抜けてしまいそうな心を引き締めてレックスに対峙する。

「あんたに対しては無条件で情報は教えよう。もっとも、オレが説明できる範囲のことだけだ」

現時点ではとにかく彼に信用してもらうしか無いのだから、この

選択は決して間違ったものとは言えないだろう。

仮に彼が協会側に回ったり、あるいは既に協会の手先だとした場合はまたその時に処分するだけだし、特に問題があるわけでもない。協会が知らぬ機関の秘密が、未だ残っているようにには思えないからローリスクハイリターンだ。

「そうかい？　なら遠慮なく……キミたち機関は世界掌握を目的とすると言ったね。それほどの軍事力、あるいは資産を持っても協会という組織に妨害される、手こずってしまうようなものなのかい？」身をゆだねるとすれば最も重要になるだろう事柄だ。

ただ貧弱な組織に雇われて、おごり高ぶったオーナーに無茶な仕事ばかりを押し付けられて死ぬのなんて誰もしたくはないだろう。

だが機関が持っている力、その強みというものをどう説明すればよいのだろうか　にわかに思惟して、衛士は頷いた。

右目の眼帯に手をかけ、引き剥がす。それを握ったまま手をテーブルに置いてから、閉じた瞼をゆっくりと開ける。

濁った白い瞳がレックスを射ぬく。

途端に、彼は思わぬ気迫を感じたようだった。咄嗟に武器になりそうなカップに手をかけて内容物をふりかけようとして、それを寸でのところでは抑える。それほどまでに、レックスはその瞳に何かを感じていた。

現在、衛士の右目は何も見えていない。そしてそれが本来の右目だった。

随時、五分間の未来を見続ける左目とは違い、こちらの能力は意識的に発現することが可能となっていた。

五キロ前後の遠隔視に、透視、透過能力。

そしてなによりも、目覚めた時に新たに得た、おそらく能力の真骨頂と言える能力……。使い続ければ五分で限界となり、ソレ以上はまともに使い物にならなくなるそれらだ。使い所はしっかりと見極めなければ単純に身体負担になってしまっただろう。

「純粋な軍事力で言えば、アメリカにやや劣る程度だ。核を持って



いないから交渉という立場まで登れないが……その他に、この世界には存在しない特殊な技術を保有している」

今でこそ世界と均衡している機関だが、その気になればどうとでもできると宣言……しているわけではないが、そういった事を匂わせている。この地上での援助が無くとも最低一年は生存できる環境にある機関は日本だけだが、アメリカは軍とズブズブで抗いようが無いし、ドイツだって同様だ。

だから世界だって、そうそう世界抑圧機関というものを邪険にしているわけではない。だからこそ国連機関の一つとして存在が認められ、受け入れられたのだ。

世界を掌握すると言っても、今はただ協会を殲滅して、さらに力を見せつけ協力体制から、向こう側から支援をさせてくれと懇願する位置にまで這い上がるだけだ。目標達成はすでにあと少しにまで迫っている。

衛士はそう説明してから、右目に意識を高めた。

「協会だけが邪魔なんだ。今更になって、機関の裏切り者が創設した組織が……オレと同じ特異点と呼ばれる機関に作られた超能力者が、邪魔をする」

昂ぶる。

誘発されるように思い返される、苦い思い出。肉親が虐殺された記憶。助けだした仲間が殺された記憶。そして、自分が殺された記憶。

右目、その眼窩に蒼い炎が灯った。

そしてその直後に精神が、その炎に炙られるように削られる。呼吸が乱れ、ただ座っているだけなのに疲弊する。

額からじわりと滲んだ汗が頬を伝って流れ落ち、衛士は大きく深呼吸した。

今にも破裂してしまいそんな憎悪を抑えこみ、心を落ち着かせる。やがて炎だけを維持して、右目の視点を少しだけ前に上に持ち上げた。

「どうした、エイジ？」

「いや、大丈夫だ。気にしないでくれ」

また深く胸いっぱい息を吸い込む。

衛士の精神はそこで安定した。

「レックス、今の時刻は何時だったかな？」

「え？ ああ……っと、午後二時 二分だけど」

「そうか、”二時 二分”だな？ 悪いが、今からそれだけを意識してくれ。ソレ以外を考えないでくれ。三分になっても四分になっても、その時間だけを意識してくれ。あんたの疑問を解消する、素敵な魔法を見せてやる」

「二時、二分を……」

袖をまくって腕時計を眺めていたレックスは、それからじつくりと、睨みつけるように時計を見続ける。

壁掛けの時計が無いために妙な緊張の中、数十秒が経過した。

あるいは一分かもしれない。その前後とも考えられるが、とにかくただ一つのソレを深く心に刻むにはあまりにも十分過ぎる時間が経ったのだ。

「覚えたか？」

「覚えられないって言ったらどうする？」

「……準備はいいか」

「何をするか知らないけど、いつでも」

レックスは軽口を叩きながらも、神妙な面持ちで衛士を見つめる。彼はその視線を受け、そして見つめ返ししながら 指を鳴らした。その刹那。

意識が、身体の中に吸い込まれていくような感覚に陥った。

視界が瞬間的にブラックアウトする中で、目眩のようにグルグルと回り始める違和感を覚える。

まるでどこか別の空間に飛ばされたような、奇妙な感覚。

その直後に、ぷつりと何かが途切れ 闇に落ちた視界に光が取り戻された。

「……ふー」

衛士は大きく息を吐いた。

「今何時？」

そして間を置かずに訊ねる。

彼はやや怪訝な表情をして、

「だから、二時二分……ん？ あれ、おかしいな……」

腕時計を凝視しながら疑念を口にする。

彼の見る時計の長針は十二から三つほどメモリが左にずれた位置に停止していて、そもそも、それまで彼自身、時刻を確認しようとするまで概ねの時刻を把握すらしていなかった。

だから思わず漏れたその時刻に、何か妙だと考える。なぜ時間を聞かれて思わずその時刻を答えたのだろうか、と。

それは衛士自身、隠しておきたかった能力だった。

今の”巻き戻し”で機関の誰か、あるいは協会の勘のいい誰かがこの能力に気づく可能性が高くなる。

遠隔視、透視のさらなる切り札として伏せていたものだったから少しばかりためらわれたが、今の状況で渋っていてもラチが明かないことは明らかだったから、仕方ないことだろう。

「そう、二時二分だ」

それは『時間を巻き戻す』直前の時刻である。

『時間回帰』は使用者以外全てに干渉して行われる。そして、干渉されたものは例外一つ無く全て五分前に回帰される。意識も、傷も、記憶も、それらを引き継ぐことは決して無い。

だが、それが起こったということを認識する方法ならばある。ある意味修行法というようなもので、衛士自身が行なっていたものなのだが、それは時間が巻き戻る直前に、時間が進退する事によって変化してしまうモノを強く意識することだ。

この場合はわかりやすく時計を使用したか、故意にモノを破壊してもいいし、何かを傷つけてもいい。

なんにせよ”時間が進んだはずなのに”、あるいは”壊したはずなのに”という疑問を抱けるような状況にさえなれば半ば成功である。

そういった状況に、時間が巻き戻るという概念を加えてやれば、戸惑いながらもそれを理解することができる。納得は後回しでも構わない。

かいつまんでそれを説明すると、レックス・アームストロングは目を見開いて衛士を凝視した。

状況は衛士が眼帯を外した直後に巻き戻ったはずだ。

ならば、彼からしてみれば濁った白い瞳に突然蒼い輝きが灯った、奇妙な場面に遭遇したことになる。

そして印象的だった瞳のこともあって、レックスは大きく嘆息するように息を吐いた。

「そうかい。キミの言うとおり、その世界掌握出来る技術を持っているのは理解しよう。今でも正直わけもわからず混乱しているが、時間が巻き戻ったことだけは真実だと言い切れる。ボクが体験したんだからね」

だが、と言葉は続く。

「返答になっていないな。ボクは、協会に手こずる程度の戦力なのか、と訊いたんだ」

「正直、未知数だ。今のオレなら負ける気はしないし、そろそろ協会も本気に潰しにかかってくる。機関としては万全の状況にしておきたいんだろう」

「キミのような存在は他に居ないのかい？」

「オレみたいなのは居ないな。少なくとも日本には。ただ、特殊能力を持つ道具を扱う奴らが数十人居る。スーパーマンみたいな身体能力になるような、特殊な道具からなにやら、たくさんあるが、その道具にさえ使えるやつやらがいて、適正があるやつしか使えない」

「普通の兵隊でも対応できるだろうに」

「たぶんな。だが慣れて無いから、相手に超能力出されたら対処法がわからなくなっちまう」

衛士はそれから大きく息を吐いて、コーヒーを口に含む。それから右目に眼帯をして、蒼い輝きを漏らしながらも一先ず封印した。

「まあ唯一救いなのが、協会連中の能力のことだな」

「へえ、一番重要なところだけど、またなんで？」

「付焼刃スケアクロウつつて人為的に能力を得た連中の能力は、得た時点で既に限界、最大なんだ。成長がない。ただ個人の熟練度だけが問題になる」

その点、特異点と呼ばれる彼らの場合は未知数の成長を遂げる。

それこそが特異点と呼ばれる所以でもあり、唯一奇跡を願い、賭けられる存在でもあった。

「それに、付焼刃は空間に干渉する能力だけだ。炎を出したり、温度を上下させたり。その数は数多だが、オレのような能力は一切使えない。ごく”常識的な能力者”だ」

「はは、常識的、ねえ。その存在が非常識だっていうのに」

「まあそりゃそうだが」

衛士は思わず震撼する。

言葉を途絶し、そして勢い良く立ち上がる。膝裏で椅子を弾くようにして、それから背もたれからコートを引き剥がして着こむ。

それから立ち上がったままコーヒーを一気に飲み干すと、壁に立てかけたギターケースをテーブルの上に置いて、ジッパーを開けた。「ど、どうしたんだ？」

「ああ、コーヒーご馳走様。あんたは今は無関係だから、今すぐここを引き払ったほうがいい」

思い出したようにポケットから財布を取り出して、中身の紙幣を全てテーブルに叩きつける。

バラバラになった狙撃銃を手軽く組み立てながら、衛士はさらに続けた。

「どうやら勘の良い連中がここにも居たらしい。多分、あんたを追

ってたやつかな。あんたは連中に手をかけてるわけだし、ただ逃がすわけにや、いかなえしな」

やれやれと肩をすばめて衛士は嘆息した。箱に入った7・62mmの弾薬をコートのポケットに突っ込み、そして狙撃銃に最大数を装填する。さらにコッキングレバーを引き、弾薬に一発収めてさらに一つ。

念のために安全装置セイフティを掛けてから、ギターケースをそのままにして準備が完了する。

その頃になると、レックスも毛皮の帽子をかぶり、負紐でアサルトライフルを肩から提げていた。

バックパックを背負って、室内の荷物は全てが片付けられているを見て、衛士は彼へと視線を移した。

「いいのか？」

「ボクを追ってきた連中なんだろう？ 結果的にキミが位置を気づかせたにしろ、尻拭いくらいは出来るさ」

「……正直、助かるよ」

衛士は思わず頬を弛緩させるように微笑んだ。

「それはこっちの台詞だ」

二人は視線を交差させ 言葉を交わさず合図をしたように、同時に部屋から飛び出した。

## 任務：障害を排除せよ

「なあキミ、どうして敵が来るってわかったんだ？」

レックスは笑顔で聞いてくる。

やはり五分の猶予があっても、一度姿を発見したら逃げきるのは難しい。

「オレは目がいいからな」

呼吸を乱すこと無く大通りを走り続ける彼らの背後には、黒塗りのワゴン ミニバン がフルスロットルで迫っていた。

「ならさ、ほら。さっきみたいに時間戻そうよ」

そうすればまた新しい対処ができる。こちらに圧倒的なまでに有利な状況を導ける。

レックスの言葉に間違いはなかったし、便利な力を目撃して尚利用しようと考えられる人間ならば迷いなくそう口にするだろう台詞だ。

衛士は横に首を振る。

「冗談じゃない。ありやオレの隠し玉みたいなもんなんだ。簡単に使えないし、なによりもすげえ疲れんだよ」

切り札には成り得ない能力だ。

そもそも、まともな武器になる能力はない。飽くまで相手よりは有利になる情報が流れこんでくるだけで、全ての事を動かすのは自分だけなのだ。自分で考え、動かなければ全てはどうにでも動いてしまう。

主導権を得るか否かの判断は、衛士に委ねられている。

「ま、オレが動かなくちゃなんだよな」

衛士は狙撃銃の負紐を肩から下ろし、銃を構える。周囲の人間がエンジンの駆動音に、その爆音に驚いて道の隅に身を退いて行く中で、銃床を肩に押し当て、安全装置を外す。

「レックス！ 横つとべえっ！」

そんなめちやくちな叫び声を合図にして、衛士は足を止める。と同時に大地を弾くように振り返り、勢い良く車目掛けて飛び上がった。

車が唸り声を上げて、コンマ秒で肉薄する。

やがて膝がボンネットにぶつかり、姿勢が勢い良く前かがみになる。身体がフロントガラスに叩きつけられ、屋根を転がり、まるでアクション映画のようにコロコロと車の上から滑るように落ちていく。

その過程、ちょうど身体が車から引き剥がされる瞬間に、衛士はそのミニバンの尻を見て　引き金を引いた。

右後輪のタイヤが破裂する。

凄まじい破裂音を周囲に撒き散らし、およそ七　キロほど出ていた速度が僅かに落ち、動揺がハンドル操作に現れた。途端に車はぐわんぐわんと弓なりに走り、スリップ。

車は回転しながら大きく弧を描き、やがてその横っ腹を適当な建造物に激突させた。

衛士は全身を摩擦しながら大地を転がり、そうして落ち着いた頃に立ち上がる。

レックスは驚いたような顔で駆けつけた。

「滅茶苦茶だな、キミ。スタントマンになれるよ」

「ちよつとの無茶ぐらい覚悟の上だ。にしても、これで終わるようには思えない……逃げるぞ！」

「ああ！」

スモークが貼られていて車の中が見えない。だから中の様子がいまいち分からないが、少しばかりはここで足止めされていて欲しいものだと思う。

衛士はさっそくその車が来た方向に走り出し、レックスはすかさずその後が続いた。

「はあ、ったく。青春映画のワンシーンかつっの！」



通りから路地に入り、対面の通りへと出る。そこから遮二無二走り続け、少しした所で足を止めた。

人通りの少ない路地だ。現在は彼ら以外に居ない。

迎え撃つとすればこの場所が適切だろう。

「やっぱり、寒い時は運動に限るよね」

「ああ全くだ。こんな心臓に悪い運動は二度としたくないけどな」

コッキンググレバーを引いて薬室に弾丸を装填。チャンバー衛士は大きく息を吐いて、車一台が通るのもやっとなその通路の壁にもたれかかった。

「だけど、ここからが本番なんだよな」

「ああ、あの付焼刃とかいう連中ね。正直アイツら『能力があるから俺最強』って感じのバカだから、余裕でしょ」

「その脳筋みてえな奴にゴリ押しされてみる。余裕で死ぬるわ」

「ま、今度はボクの力を見せる番かな。立場はともかく、今は生き残るのが最優先だ」

「んじゃよ、もし協会に、仲間になれって勧誘されたら、あんたはどうすんだ？」

「有利な方につく。人数がいてもバカばっかはちよつと勘弁かな」

「ああ、ちよつと安心した」

ほつとわざとらしく安堵を漏らす。吐息は白く染まりあがり、簡単に空気中に溶けてしまう。

そんな折に、ぜえぜえと呼吸を乱す連中が路地の中へと侵入した。

二人組だった。

何かスポーツでもやっていたのかと思うような体つきは、分厚いコートを着ていてもよくわかる。

一人はスキンヘッドの、マフィアか何かのような男であり、もう一人はドレッドヘアの黒人だ。そしてふたりとも揃いも揃って手ぶらだった。

何かの冗談なのかと思ったが 表情の中に垣間見える余裕から、どうやら能力に自信があるらしい。

衛士は一先ず発砲を試みる。

銃弾はいつものように回転して瞬く間に男の胸に肉薄。そして貫通。

スキンヘッドの男は胸から血を吹き出して、空を仰ぐ。それから膝を折るように崩れていく、その最中で動きが硬直した。

否、固まったのはその男の動きだけではない。

彼は全身に霜を落としたように白く凍えて凍りつく。周囲の大地、壁には氷が亀裂のように走っていく。

気温は先ほどとは比べものにならないくらいに、まるで冷凍庫にでもぶち込まれてしまったのかと錯覚するほどに下がり、冷えてくる。

「おいおい、お前一体誰殺してんだよ……？」

そうして声は、怯えて腰を抜かすドレッドヘアーの男の後ろから聞こえてきた。

発砲音。

男の後頭部が撃ち抜かれるのと同時に、姿が現れた。

「テメエら散々手間取らせやがってよ、いい加減頭に来んぜ……！」  
突撃銃を構える二人組。

それぞれ覆面をして正体を隠すが、迷彩服に覆面で突撃銃を構える輩だ。異様だということだけはすぐに伝わった。

「なあキミ、思ったことを言ってもいいかな」

「ご自由にどーぞ」

「帰りたくなってきた……」

「なら良いぜ、見学コースに移行だ。よく見とけよ……っ！」

弾丸を装填し、衛士はレックスの一步前に躍り出る。

面倒だから少しだけ無茶をしようと思つた。狙撃技術を近接戦闘に生かした、無謀過ぎる銃撃戦。それを試みてみようと思つていた。

「ふう……はっ！」

腰を落とし、構え、照準。

発砲。

が、二人は即座に先ほど死亡し凍りついた一般人の陰に隠れてやり過ぐす。弾丸は死体の頭部を砕き、隠れた男に凍りついた肉片を浴びせるだけに終わった。

弾丸を装填。

衛士は迷いなく、だが走るわけでもなく前進した。

「レックス、もうちょつと後ろの壁際にいてくれ。多分、そこは危ないかも」

照準、発砲。

スキンヘッドの右腕が崩れ落ち、背後の地面に弾丸が叩きつけられる。

男達は隠れるばかりで、行動はない。そう思っていると、ふいに足元へ、氷が亀裂を作るように線状に走ってくる。

衛士はそれを落ち着いた面持ちで見極めて、それがすぐ股下で停止したのを見て、身を翻す。

刹那、もぐらが這ってきたような穏やかさは途端に失せ、音もなく氷は錐状の氷柱つららとなって虚空を貫いた。切っ先は衛士の頭頂に達する長さである。

男はそんな様子を、氷像となる死体の陰から覗き見ていて。  
発砲。

弾丸は、吸い込まれるように男の額を撃ちぬいた。

悲鳴もなく、血を吹き出して呆気無く仰け反り、背中を地面に叩きつける。

一人撃破だ、と衛士は何の感慨もなく、それが当たり前のように心に呟いた。

「く、て、てめえ……まさか　と、トキ、エイジなのか……？」  
男が不意にそう口にする。

敵に名前を呼ばれたのは、さしもの衛士もこれが始めてだった。  
「だからいざ」 実際”に聞いてみても、動揺してしまう自分に気づいて、彼は足を止め嘆息する。

時間稼ぎなのだろうが、どちらにせよなぜ名前が知られているの

かを聞き出さねばなるまい。その理由が如何なものか確かめなければ今後の仕事に関わるからだ。

ただ当てずっぽうだったのかもしれないし、何かに気づいて……という具合なのかもしれない。

コッキングレバーを引き、ポケットから弾薬を幾つか取り出して装填しながら、衛士は口を開いた。

「何を言っているかわからないが、そのトキ・エイジだとしたらならんだっていうんだ？」

「いや、そうだ。その顔、そして眼帯……その下には、あの光る蒼い目があるんだろう？ そうなんだろう？」

「……そういうお前は誰なんだ」

こいつは、多分。

カチリと、頭の中で何かのスイッチが入るのを、衛士は確かに聞いた。

「ははっ、やつぱりてめえか……ッ！ くく、あははッ！ 随分立派になったなあ！ あん時や『姉さん姉さん』でまともに戦えなかったんによ、ああそうか……正直言やあよ、俺らは最後の、お前の目にビビって……」

ビビってた。

だから最後の最後、既に死に体である時衛士に止めを刺す瞬間にまで至ったというのに彼らは逃げ出してしまった。

四十二人という圧倒的な数の暴力がありながらも、たった一人の意識なき、純粹な殺意だけを孕む存在に畏怖して体が動かなくなっていた。

ただ一人の少年の肉親を焼き殺し、犯し殺し解体し、それを目の前でやってのけて 男は懺悔でもするようにそう口にする。

仕事の中の一つであつた少年に対する懺悔。今まで、あの日から妙に頭の中に残っていた出来事。ここで全てを吐き出し、許してもらえればすっきりする。彼はそうとさえ思っていた。

そもそも殺すための仕事ではなかったのだ。彼を、この時衛士を

『特異点』に昇格させるために絶望を与えさえすればそれで良いというのが、上層部からの命令で、だがその時点では何も知らず”痛めつける”とだけ言われていたから、仕方のないことだった。

そこまで言うと、彼は顔を上げる。

銃口はちょうど、太ももに突きつけられた。

「ああ、そうなんだ」

発砲。

血しぶきが舞う。穢れた血が、衛士の全身を満たしていく。

男は言葉にならない悲鳴が撒き散らしながら横たわり、衛士は熱の失せた声で続けた。

「だからなんだよ」

発砲。

もう片方の足に弾丸が突き刺さる。

肉を裂き筋を千切り大腿骨を砕いて、尋常ならざる出血。太い血管でも断裂したのだろう。

ここで仮に生き残ったとしても、もうまともな生活は送れないだろう。

衛士は腰に手をやりナイフを抜こうとするが、そもそも持つてきていないことを思い出した。

そうだ。そもそも近接戦闘をする予定はなかったのだが、どうにも惜しいことをした。

衛士は負紐を肩に掛けて、狙撃銃に安全装置セイフティを掛けて、肩に提げる。

コートの中から拳銃を抜き、弾丸を薬室に送り込んだ。

「黙ってりやもつと楽に死ねたのに、お前バカだな」

そしてどうしようもないクズだ。

全てを懺悔すれば、「よく素直に言ってくれた。お前を評価して許してあげよう」とでも言われると思っていたのだろうか。

ならばなんだ、ここは彼らにとって小学校か中学校か？

ふざけやがって……！

発砲、発砲、発砲。

両肩に弾丸を突き刺し、肘、手のひらを撃ちぬく。さらに残った弾丸を全て腹に叩きこんで、にわかな硝煙が上がり、あたりに空薬莖が撒き散らされた。

既に悲鳴はない。

衛士が男の口元に手を近づけると、その血まみれの口からは未だに臭気が吐き出されている。

良かった、生きていた。意識があるかは定かではないが、血だまりの中で仇敵は生きていた。

衛士は大きく息を吐くと、静かに呟く。

「死ぬまで苦しんでろ」

既に仕事は終えた。

彼は、彼らがそうしたように止めを刺さずに背を向ける。拳銃をコートの内側のホルスターにしまい込んで、だけどボタンは閉めずに、熱くなった身体に冷気を当てる。

「前一人殺したから……あと四人か。こんなバカばっかなら数えるのも簡単なんだがな……」

白いコートは、奇抜な返り血の模様を新たに付けて、やがてレックスの元へとやってくる。

彼はどこか怯えた、正確には驚いたような表情で衛士を見ていた。

「人を殺すのに躊躇が無いね」

「なんだよ、人には家族があつて、価値があるみたいな説教するつもりか？」

殺した相手にも家族がある。以前そう考えたことがあつたが今はどうも思わない。

こうやって死ぬる場所に来ている時点でその責任を負ってやる必要は皆無であり、もし責任を取らざるを得なくなつたとしたら、衛士は迷いなく引き金を引いて弔うだろう。彼はその決意を、とうの昔に固めていた。

「いいや、頼もしいと思って。キミ、歳はいくつ？」

「言わなかったか？ 十七だつて」

「じゅ、十代かあ……若いな」

「にしても、こんだけドンパチ騒ぎしちゃモスクワにも居られない  
つて、マジかよ……」

衛士は思わず左目を塞いだ。大きく息を吐き、肩を落とす。その  
所作は見るからに落胆の行動だった。

レックスは、それでなんとなく察しながらも、とりあえず訊いて  
みる。

「どうしたんだい？」

「警察に、それとさつきみたいな黒のワゴンが数台、ここに来る」

「……はは、どうしよう」

まるで冗談を言ったみたいにレックスは笑ってみせる。ほうれい  
線が浮き出るあたり、彼もそうそう若くはないのだろつと、彼は場  
違いにそう思った。

「まあ、最初の内に数を減らしておこう」

衛士は言つて、手早くその場から離れるように走りだした。

## 任務：障害を排除せよ？

時衛士は僅か齡十七にして、傭兵さながらの修羅場をくぐり抜けてきた。

そういった物珍しさや、人当たりの良さ、そして認められる確かな実力から多くの人間が彼に寄ってくる。

だがそれと同じくらいに、敵も多い。

それは、例えば今のうちに。

「軍まで動いてるみたいだけど、どうなの？　もしかしてテロリストと間違えられてる？」

後ろからはサイレンを鳴らすパトカーが三台ほど連なっている。さらに交差点から合流した二台、パトカーの尻に食いつき、さらに正面から新たに二台やってきた。頭上からは警察のヘリコプターが飛び、住民の避難がなされた通りは閑散としていた。

「軍なんて知らん。警察ばっかだろ」

そうして彼らは今、レックスが見事なテクニックで放置されていた大型バイクを上手く活用してくれたお陰で、なんとか追いつかれずに済んでいる。

全身に突き刺さる寒波を物ともせず、彼らは数十分にも及ぶカーチェイスの結果、いよいよ建造物の少ない一帯へと出てきた。

レックスは前を向いてハンドルを握り、背中合わせに座り込む衛士は、そこでようやく狙撃銃を構えてみせた。

「なあレックス、もういいんだろ？」

「そうだね。やるならここいらが良い」

「たく、手がかじかんで反応が鈍いぜ……」

体感温度が既にゼロに近いせいで、指先の感覚は失われている。

衛士は手のひらでコッキングレバーを何とか固定すると、肩で銃を固定し、手首に押し当てるように力一杯引いて弾丸を装填した。

これでは引き金を弾けるか少しばかり不安だ、と思いながらも、照



準器を覗き込めばそんな意識の一切が消え失せた。

「キミ、言っておくが」

発砲。

慣れた衝撃が木の銃床ストックを介して肩を打撃する。同時に銃口から散った火花が、その硝煙が熱をもって顔に掛かる。にわかな暖かさに、衛士は思わず大きく息を吐いた。

7・62mmの弾丸はいつものように飛来する。パトカーの前輪に触れると、間もなく分厚いゴムを貫いてホイールに突き刺さった。パトカーは走行中に地面に火花で軌跡を描きながらホイールからゴムを引き剥がし、そして破裂音と共にハンドルの自由が利かなくなる。

スリップ。

仲間のパトカーを巻き込み、盛大な衝突音を響かせて追手の警察は、頭上のヘリコプターのみとなる。

背後のミニバンは、器用にその隙間を通り抜けてやってきた。

「何か言ったか？」

「いや、なんでもない」

レックスは肩をすくめるように笑って、勢い良くハンドルをひねった。

エンジンが唸り声を上げ、マフラーからの排気が増幅する。振動が尻を叩き続け、加速した。

雪が溶けていない道路を走り、舞台は郊外へと移行する。

バイクが徐々に速度を落として やがて停止したのは、それから間もなくの事だった。

「まあ、避けられないことだったと思うよ」

彼は力なく言った。

そして衛士自身もそうだと思っていた。

バイクの先には装甲車が一台。背後からは協会のものと思われるワゴン車が四台。

こればかりは、さすがに八方ふさがりだと言わざるを得なかった。

この状況から逃げ出す案は無いし、生き残る可能性すら低いことを悟っている。

「どうした？　突然無口になって……ビビったのかい？」

「……っ」

口ごもる衛士に、レックスは軽く笑った。

バッグパックに無造作に突っ込んだM16を抜いて構える。さらにそのバッグから無造作に、長方形の手榴弾を取り出した。

「見るからに向こうの方が強そうだけど、寝返らないのか？」

「……キミは何を言ってるんだ？」

声は、呆れ返ったような彼の心境を孕んでいた。

「さっきのは見学コース。これは体験コースだろう？　まさか、こんな”イイところ”で帰れなんて言うわけじゃあ無いよね？」

「能力者が複数人に、装甲車相手だぞ？」

「……キミはボクを無礼<sup>なめ</sup>てるのか？　次そんなふざけた事を口にすると……ははっ」

妙なまでにノリノリでそう告げた後、装甲車のドアが開く。

その刹那に、レックスは握っていた閃光手榴弾を作動させ、カー杯装甲車の方へと投擲してみせた。

衛士の頭を強引に突き伏せて、そのままバイクの陰に隠れること数秒。装甲車の中、そしてワゴン内が少しだけ慌ただしく感じられて　波紋のように広がる衝撃波と共に、爆発的な閃光が周囲を包み込んだ。

「キミはさんざ粋がってたのに今になってコレって、ギャグか何かかい？」

空気が重くなったのか。

あるいはあまりの衝撃に鼓膜が麻痺してしまったのか。

ともかく、レックスの余裕綽々な台詞はこもったように鈍く聞こえて、まぶたを透過して瞳に突き刺さった閃光のおかげで世界は白と黒とを反転させていた。

有能かつ有名な傭兵は、幼子の手を引くように立ち上がらせる。

「幸運なのはキミが居ることだ。後ろを向いて、キミは後ろだけに集中してくれ」

言いながら彼は装甲車から飛び出て、開いたドアに隠れる陰へと射撃する。

衛士も、言われるがままに麻痺する視覚、聴覚をそのままに伏せて、構え、照準し　発砲。

身体に染み付いた感覚やクセなどが手助けし、弾丸はフロントガラスに突き刺さり、貫くこと無く停止した。ガラスは白く染まるように粉々に砕けていたが、飛び散ることはなく、一応ガラスという形状を維持している。

胃が痛くなる。

「どうやっても、どう行動しても”死”しか見えない。」

コッキングレバーを引く力が、引き金を弾く意思が薄れていく。

装甲車の向こう側から異質の駆動音を、振動を感じながら彼は大きく息を吐いた。

ミニバンからは、ようやく総数十四名となる覆面の男達を吐き出した。構えるのは、このロシアの地を意識したのだらうAK-107だ。バレル  
グレートランチャー銃身の下には砲筒が装備されている。

彼らは見事に狙撃を意識して車の陰に隠れたまま、二人組の様子を伺っていた。

装甲車も同様だ。レックスの射撃は威嚇程度の効果しか発揮していない。

これで弾切れにでもなっつまえば……。

「く……くそつ……！」

そうだ。

助けを呼ぶしか無い。

どうあっても死ぬわけには行かないのだ。この状況なら、すぐにでも誰かを送ってくれるはずだ。

衛士が、敵を照準しながらコートのポケットから通信端末を取り出す。凍えた指先で操作し、焦りを抑えてダイヤルを回した。

少しばかりの無音が続き。

発砲音。

壁となるドアの脇から突き出された銃口から放たれた弾丸は、衛士の左耳、そして左手の人差し指と共に通信端末を吹き飛ばした。

ぞわり、と背筋が粟立つ。

心臓に冷血が送り込まれるように、息が詰まった。

それからややあつて、指先に、そして左の失われた耳たぶがチリチリと焼けるように熱く、常に刃物で斬りつけられているかのような激痛を覚えた。

悲鳴を押し殺す。

呼吸が不安定になって、衛士はそれでも手を入れ替え、引き金を中指で操作した。

発砲。

弾丸はドアに穴を開ける。それだけだ。敵も殺せない。役目も果たせず、己の命を守れない。

ミシエルが異変に気づいたとして、仲間を送り込んでくれたとして。

果たして、それまで生きていられるだろうか。

ここで五分を巻き戻したとしても既に手遅れだ。

駄目だ。

また、死ぬのか。

オレは。

「なあキミ、何勝手に絶望しているのかわからないが、まだ生きていたいというつもりならさっさと働いてくれないか？」

レックス・アームストロングは力強く意思を持つようにそう告げる。

彼は前を見据えたまま、背後の状況など音から察するしかしていないはずなのにもかかわらずそう言った。

敵を威嚇したまま、さらに応援の装甲車を見ながら、衛士を激励する。

「思考を停止すな。キミは多分、未来を視るだとか、感じるだとかしているんだらう。そしてそれがキミを手助けしてくれているのだらう?」

敵の襲来を察知している所からそう考えたのだらう。妥当な判断だ、と衛士は思う。それがどうした、とさえ思った。

「だといのにキミは諦めた。未来を知る事ができるのに、結果を変えられるのにもかかわらず、過程だけみて諦めてしまった。愚かだよキミは」

もつとも、まだ子供なキミには仕方のないことなのだろうが。

レックスはそういつて、大きくため息を付いた。

射撃をやめ、バックパックから弾倉を取り出す。すると装甲車から飛び出した三人程が一斉に衛士ら目掛けて射撃を開始して 衛士が今にも消え入りそうな声で指示する。レックスは言われた通りの位置に、そして跪いた姿勢で待機すると、弾丸は全身に掠るが直撃することは決して無かった。

出来るじゃないか。

満面の笑みで、威嚇を再開しながらレックスは口にした。

「どんなに余裕でも、どんなに絶望的でも思考だけは常にフルスロットル、走り続ける。考えないことは生きること放棄するのに等しいから」

口角を吊り上げ、その気持ちの悪い励ましの言葉に全身の毛という毛を逆立たせながら、獰猛とも言える笑みを衛士は浮かべた。

第二関節から先が無い人差し指を眺めながら、そこから滴った鮮血が雪の大地に紅い斑点を作るのを視界に収めながら。耳から流れた血が首を沿ってインナーを血まみれにする、具合の悪い着心地の悪さを覚えながら、衛士は大きく息を吐いた。

右手で眼帯を外す 否、その強引な所作は引き剥がすに相応しい。

限界など知るか。

言葉にはならず、されど口はそう言った。

「オレの後頭部を撃て」

続けてレックスに命令する。

右手に握るソレを投げ捨てる頃には既に、右目には凶猛な蒼い鬼火が、眼窩から溢れんばかりに滾っていた。

狙撃銃シュツクを抱えて立ち上がる。もとより右利きだ。彼は左肩に当てていた銃床ストックを右肩に当て、引き金を右手に任せる。

その刹那だった。

不意に、窓からその陰をのぞかせていた男の姿が消える。刹那、消えると認識するよりも早く、男の気配は背後に迫った。

撃発。

戸惑い、躊躇いすらないレックスの発砲は、見事に瞬間移動してきた男の後頭部を撃ちぬいた。

頭蓋骨に穴を開け、流血と共に脳髓を垂れ流して男は倒れる。感慨もなく、風景の一つとして彼らはその姿を見送りながら。

衛士は続けた。

「相手が動くまで待て。相手が自分から有利な陣形を崩してからがオレたちの仕事だ」

果たして。

そう告げてからの均衡状態は、そう長く続かなかった。

痺れを切らしたのは、あっけらかんとしていた軍人、ではなく。

己らの能力者なかまの死をにわかに受け入れられなかった、その上で能力者という”絶対上位”的存在である自分たちがそう容易く死ねるはずがない、負けるはずがないという一種の信仰じみた思想に駆られた付焼刃スケアクロウだった。

それこそが、付焼刃などと呼ばれる所以なのだと知らずに。  
「くられ、豪雪ナダレッ！」

親日なのか、あるいはただのマンガファンなのか。

男は格好良く叫び、ドアから飛び出て腕を前に突き出した。

それとほぼ同時に、衛士が引き金を弾く。弾丸が飛来し、簡単に男の胸に血華が散った。

足元の踏みつけられて固められた雪がにわかに増量した所で動きが止まり、男は吐血し、崩れていく。

動揺してドアから飛び出て、その男を介抱、あるいは救助しに飛び出てきた妙に華奢な覆面姿の側頭部を、迷わず撃ちぬく。

数台分の列を成すミニバンの後ろの方から、甲高い悲鳴が聞こえた。

「軍の方は殺すなよ。そっちはある意味被害者なんだから」

「わかってるって。そっちは手伝おうか？」

「いらねえ」

そっけなく告げて、声の高い、明らかに女性であろう姿が半狂乱に銃を乱射して現れたのを見る。何の阻害も無く、車を穴だらけにして、また衛士らの足元に弾丸を突き刺しながら走ってくる。哀れだと思う、痛々しい姿に衛士は、その姿がもう少しだけ近づくのを待った。

発砲。

良い感じに協会連中全員に頭を撃ち抜かれた姿が見えるように、額を撃ちぬいた。

彼女は痛みを覚える間もなく逝ったのだろう。不意に声は消え、どさりと背中から倒れこんだ。

上空からの視界は、未だ敵を監視している。僅かな所作すら見逃さず、それ故に片手での装填作業に余裕が持てる。

衛士はくたびれたように、細々と息を吐いた。

「あと八人」

「いい加減、今日は撤退してもらうように頼んでみれば？」

「冗談。んな弱みでも見せてみりゃソッコーで蜂の巣だ」

そんな折に、先頭の陰が砲筒を衛士らに向けるようにドアの隙間から突き出していた。

アホだ。

すごいバカだ。

衛士は思わずそれを一笑してから、狙い、撃つ。

さすがの衛士でもその砲筒の中に弾丸を打ち込むことは出来なかったが、その腹に銃弾を叩き込み、銃自体を破損させる。銃身もひしゃげて半壊し、使い物にならなくなる。ついでに男の悲鳴も耳に届いた。

そして自暴自棄に飛び出てきて、その身体から電撃が迸る瞬間、同時に胸を撃ちぬかれて鮮血を吹き出した。糸の切れた操り人形のように膝から崩れ、顔面を雪の中に埋める。

後七人。

能力は便利だ。

それこそ相手に有利に立てる。

だが、飽くまで有利に立てるだけであり、相手より強くなったわけではない。

だからこそ、彼らのように能力ありきの戦い方ばかりに徹していれば、こうして相手を追い詰めたつもりが追い詰められたことになった場合に対処できない。

衛士らも、彼らから見れば今こそ僅かな隙も無く、逆にほんの少しでも隙を見せれば殺してくるような強敵だ。だが本当のところは違う。攻め方、能力の活用方法さえ変えればいとも簡単に形勢逆転することが出来る。

彼らはただ、それを考える余裕を与えず、さらに何をしても殺してやれるぞという余裕を見せているだけだ。衛士が学んだのは、己自身が弱音を見せた時に畳み掛けられそうになったからである。

かつこいい戦術も戦略も持ち合わせない。堅実でもない。

それでも、これが現状で考えられる最善の状況打破の戦術であり、賭けでもあった。

戦いに勝つにはまず考え、相手を崩すこと。

あるいは最初期の勢いを以て掛かることだ。猛禽が急降下して獲物の骨を打ち砕く刹那、つまり敵に掛かるその刹那に、それまでに蓄積した全てを放出する。

もっとも、一番良いのは戦わないことだ。



その上で勝利する。

戦闘とは作戦があつて初めて起こりえる事象であり、それを防ぐには作戦の意図を挫かせればいい。

もつとも、何らかの暗殺や殺害が目的であつた場合は、覚悟をしなければならぬのだが。

開かれたドアの上から二本の腕が突き出た。

衛士はその間を撃ちぬくと、怯えた声が聞こえてきた。

「ま、まってくれ！」

ドアの陰から、恐る恐るといった風に出てくる男は、覆面を脱ぎ捨てて、やがて姿を表した。

「こ、降参だ。これ以上、もう殺さないでくれ」

「随分と都合の良い台詞だな。分が悪くなつたら手を上げて、動物よろしく服従の意を示せばいいのか？　なら、仮にさっきオレがそうしていればお前らは手を出さずに生かしてくれたのか？」

「あ、ああもちろ」

引き金に掛ける指に力を入れる。

「口先だけの言葉はよせよ。問答無用で殺すぞ」

「……生かさなかつた」

「命令か？」

「そ、その男だ。そいつが、俺たちの仲間を殺したから……」

「私怨か。それだけで随分と動いたな」

まあいい、と衛士は引き金を弾く。

弾丸は、力強くミニバンのドアを叩いて穴を開けた。

「一人だけ死ぬかもしれないねえ所に出して交渉させて、他の連中は安全な所で返事を聞くだけか？」

衛士は狙撃銃を捨てて、コートの中から拳銃を抜く。

男は少しだけ安堵したように、口元を緩めた。

そしてそろそろと、衛士の言葉に応ずるように姿が現れる。

自主的に手を頭の後ろに回して、その男の横に並んだ。七人は既に武装を解いてそれぞれ覆面を捨てる。男女入り混じるその中で共

通しているのは、誰もが怯え、表情を引き攣らせているということだった。

「おい、死にたくないなら一つだけ、素直に答えるよ？」

レックスは意識を衛士に向けながら、依然として戦闘に参加してこない装甲車を威嚇する。が、既に射撃はやめており、銃をつきつけるだけの形だった。

付焼刃は喉を鳴らす。

衛士は少し開けてから、言葉を紡いだ。

「今から約四ヶ月前……八月に日本で、ある少年に百人ほどで襲いかかった、そういう作戦に参加したやつ。黙って手を上げる。五秒以内に、素直にだ」

五、四……数えると、意図がわからないのか、それぞれが目だけで互いに相談する。

そうして間もなくゼロになる、その直前に二人の手が上がった。

黒く長い髪を後ろで一つにまとめる女と、その隣に立つ短髪の男だ。それぞれ迷彩服にタクティカルベストを着こむ姿で、緊張の面持ちで衛士を見ていた。

「おい、キミ。分かっているだろうが、彼らは降伏している。決して次回は無いと言いつけないし、恐らく彼らも今回さえ生き残れば懲りずにこういった場に参加する。だが、今はどうしようもなく無防備なんだぞ？ その上でキミがしようとしていることはとんでもなくゲスでクズだ。分かっているのか？」

「……オレの、唯一の人生の目標なんですよ。復讐する。それが今の、オレの生きる希望でもあります」

「虚しいだけだぞ。生産性がない」

「いいんすよ、終われば、オレの物語の幕を落とすだけだ」

「ともかくだ。今引き金を引けば、キミの中で唯一保っていたであろう何かが崩壊する。理解できているのか？」

炊きつけたのはレックスだ。

それを重々承知しているし、お陰で今生き残れている。だが、ま

るでタガでも外れたように衛士は今行き過ぎている。単なる殺戮を楽しんでいない事だけが救いだ、心の中の闇ならば、ただの殺戮衝動に駆られるよりもはるかに深い”復讐”というソレだ。

泥沼に、どつぷりと首元まで使っている。だというのに彼は笑っていた。

この少年は、この若さにして戦える。こんな所で潰れるべきではないし、戦場でなくとも生きていける。素質がある。だからこそレックスは、本来ならば放って置く惨事を咎めていた。

時衛士が今仇を殺して、その途端に何かが変わるわけではない。ただ、その殺害や殺意が日常化するだけであり、さらに彼の言葉が誠になる。本当に、全てが終われば最後に殺すのは己になってしまふ。その可能性が極めて高まる。

彼には救いがない。希望がない。だがそれは無いのではなく、彼が求めず作らないだけだ。

だから、今だけはこれを止めなければならない。  
その刹那だった。

不意に、衛士と付焼刃の間の虚空に光球が生まれたかと思うと、不意にその光が膨張した。

まるで閃光手榴弾が展開していく様をスローモーションにしているようであり、それと同時に、妙な気配が増えたのをレックスは感じていた。

網膜を焼き尽くすような輝きが失せる。

それぞれの戸惑いの最中に、ソレは現れていた。

「……これは、どういう状況だ？」

褐色肌の娘は、その空気を肌感じて同様に戸惑って、思わずそう訊ねずには居られなかった。

長い白髪で左顔を覆うようにして、身体に張り付く全身タイツのような装備 『耐時スーツ』<sup>たいじ</sup>と呼ばれる、身体能力強化、その他諸々の特殊効果を備えるソレを着こみ、またその上にタクティカルベストを着込んだ格好で、腰に手をやる。

黙りこくって喋らない衛士に肩をすくめて、今度はレックスへと視線をやる。

彼は頷き、かいつまんで説明してやった。

「まあ、協会が降参してきたわけですが、彼が復讐のために”例の時”に居た二人を殺そうとしたんです。ちなみにこちらの前の連中は軍です。頭上のヘリは警察ですが、どちらにも死人は出してませんし、足止め以外でこちらからは手を出していません」

「……エイジらしいといえば、エイジらしいな。まあいい、この場の決定権は私に委ねてもらおうぞ」

「ご自由に」

「エイジもいいな？」

「……………、いいえ」

視線を流し、困ったように口をへ字に固めてから、衛士は短く答え、首を振る。

エミリアは一步踏み込み、そのまま構わず、胸ぐらを掴み上げた。衛士は驚いたように目を見開いてから、そのまま両腕を垂らし、抵抗を諦める。

言葉は彼の目の前から突き刺さった。

「現在の貴様の目的はなんだ？ 言ってみろッ！！」

「れ、レックス・アームストロングとの協力体制を結ぶ事……です」  
「貴様は今何をしようとしていた？」

「……オレの、あの作戦に参加していた奴を、殺そうと」  
「貴様はそのクセに”私怨”がどうのこうのとご高説をのたまっていたのか？ 随分偉くなったな貴様はアッ！？」

全てを聞いていたのだろう。

あるいは、来る前のこの状況の全てをミシエルから聞いてきたのか。

どうであれ、エミリアはこれまでを知っていても尚わざとらしく彼らにこの状況を訊いていたのだ。

そして丁度いいタイミングで現れた。

随分とまあ、手の込んだ連中だ。

レックス・アームストロングの機関に対する評価は、微妙な位置へと登り始める。

エミリアは衛士を突き飛ばして振り返ると、そのまま一人ひとりを睨みつけ、眉間にシワを寄せたままで吐き捨てた。

「顔を覚えた。足元の肉塊と同じになリたくなかつたら、二度と私の前に現れるな」

次いで、ポケットから通信端末を取り出すと、何の警戒もなく耳に押し当てた。

「転送を頼む」

短く指示し、端末をしまう。

振り返ると、今度は呆然としつつも自分の荷物をまとめる衛士を他所に、今度はレックスへと照準を合わせた。

「貴様の身柄を一時保護する。乱暴にするつもりもないし、強要するつもりもない。敵を作りたくはないからな。衣食住を提供しよう。その後の判断は、貴様の自由だ。それでいいな？」

「文句のつけようがないですな」

肩をすくめて返事をする。

エミリアは仏頂面のままうなずいて。

閃光が瞬いた。

そしてソレが収まり、三人の姿が消え失せた頃。

戦闘は終了し、傷だらけの付焼刃と、半ば被害者である巻き込まれた軍だけが、互いに標的を失って虚しくその場に残っていた。

## 手紙

「具合はどうだい？」

レックス・アームストロングは衛士の自室で優雅にコーヒーを飲みながら、眼を覚ました彼にそう声をかけていた。

失われた左手の人差し指は義指の骨組み装備されていて、指先はしっかりと動く。良く見れば、表皮のシリコンカバーが株されていないだけである。さらに左耳は頭ごと包帯で固定されていた。

衛士は自分の身体をそれぞれ点検するように全身をくまなく、頭の中で理解してから、身体を起こす。大きく息を吐くと、喉の渴きを覚えた。

「……おかしいな。転送したところまで記憶があるのに」

なぜだが、自分が眠るまでの記憶がない。

どこまで回帰してもあの光に自分が飲まれるまでの意識しか存在せずに、それ以降が見当たらない。ついに何らかの影響で記憶障害を引き起こしてしまったのかと不安に思うと、レックスがそれに補足した。

「キミはあの後、すぐにエミリアに寄りかかるようにして気絶したからね。聞く話によると、右目の限界が過ぎたせいらしいけど」

寝癖で逆立つ髪をそのままに、衛士は気だるげに再び寝転がった。右目は常に閉じているクセのせいで気づかなかったが、眼帯はモスクワに捨てたままだったことを思い出した。つまり今、能力を発動させて眼を開けば、眼帯という障害が無いせいで発現してしまう。別にどうということではないのだが、割合に長い付き合いになっていたアレを失うのは少しばかり物悲しい気がした。新しい何かを買おうにも面倒だ。医療用の眼帯でも、適当に仕入れようか。

「お前はなんでここに居るんだよ」

「衣食住を提供してくれるって言われて、案内されてここに来ただけだよ」

「……それで、アンタは機関に手を貸すのか？ 正直な所、あまり関わらないほうがいい」

「あはは、キミが勧誘しにきたんだろう？」

「ありや仕事だからな。建前と本音は真逆だ」

「ま、戦ってる姿みれば大体わかったけどね」

戦う目的は、己の復讐のため。

そのために機関を利用しているに過ぎないというのは、わざわざ彼が激白するまでもなく明らかな姿だった。

にしても、と衛士は嘆息した。

自分が強くなったと思っていた。

限界など知るかと思っていながらも、無意識の制御のせい、透視能力を使おうという発想すらなかった。アレさえあれば、時間をそう使わずに敵を殲滅できたはずなのに。

自分の力というものに自信が持てない。

勝てると言い聞かせるだけで、自分が自分の力でそうできていると思ひ込めない。

敵を殺せるのは単なる幸運で、自分が生きているのはそういう運<sup>さ</sup>命<sup>だめ</sup>だから。衛士は、思い返せばこの機関というものに来てからずっとそうだったような気がした。

次の任務が無いなら、またハーガムに鍛えてもらおう。今度は妙な心配をされないように、適度に、技術面をくまなく。

「はあ……レックス、アンタは結局強いのか？」

「何を突然……どうだろうね。神様にでも生かされてるだけじゃないか？ まあ、土壇場に強いって良く言われるけど」

「くそ、天才タイプか」

「そういえばエミリアがこれまでの医療費を口座から差引いとくって言ってたけど大丈夫なのかい？」

流れるように話を転換するレックスだが、そんな不意な話題に衛士は反応する。

そういえばここ最近力ネに手をつけていなかったから、入院費や

ら何やらが一体どうなっているかわからなかったが、今まで機関が払ってしてくれたのかとようやく理解する。と同時に、その料金がどれほどのものなのかと気になった。

「いくぐらい？」

「そうだな……ざつと二 万くらいって言ってたけど」

「うわー、すごいボツタクリ」

最大で一千万を予想していたお陰で傷は浅い。

一ヶ月ほどの入院に、義指だ。さすがに安いとは思わないし、普通とも思えないが妥当なところだろう。

「……今日は何が言われてたか？」

「ああ、仕事とか？ 特に何も。何かあるときは人が来るらしいよ。あ、そういえば暇だったから洗い矢とかガンオイルとか、色々借りてボクのとキミの火器類をメンテしておいたよ。ロッカー無いから壁に立てかけといたけど」

「マジか、ありがとう。分解は？」

「いや、さすがにそこまではしてない。自分のはやったけど、狙撃銃って繊細だし。組み立てた人によって変わるからね」

「ホントに助かる。そう思うと色々とし訳なくなってくるな。勝手に巻き込んで……」

そうだ。

勝手に巻き込んで、人生が大きく変わる。

自分がそうだった。だからせめて、そういったことだけはしないようにと思っていたのに。

衛士は身体を転がして、壁を向いた。

テーブルに付属する椅子に腰掛けて足を組むレックスに背を向ける形になったが、彼は特に気にした様子もなく、カップを口に運んだ。「そういう事はあまり深く気にしないほうがいいよ」

「ああ、そうだな……」

ミシエルもそうだった。

今の自分と同じような気持ちを、ずっと消えることも忘れること



もなく抱いていたのだろうか。

そう思えば、なかなか辛かっただろうと思う。

だから、あの時の自分の行動は正しかったのかもしれない。今も目覚めて自暴自棄になっていた時も接してくれたのを思えば、確かにそうだと思える。それに加えて彼女がやさしいこともあるのだろう。

良い人ばかりに恵まれた　それと同時に、何か、大切な事を忘れていたような気がした。

なんだろうか。

疑問に思い、記憶の海に潜り込む。

そうしようとした刹那に、来訪を伝える玄関チャイムが音を響かせた。

「……ホロウ・ナガレが、オレに？」

「ああ。そしてまた一つ、不穏な空気があつてな」

エミリアは、レックスが差し出したコーヒーを含み、飲み下す。

衛士は寝台に座り、椅子に腰掛けるエミリアに視線を投げながら、渡された手紙の封筒を一瞥した。

ホロウ・ナガレは協会の創設者だ。そして特異点と呼ばれる、唯一成長性を持つ特異能力を持つ存在であり、数年ほど前に機関を脱した男である。

協会の目的は機関の妨害であり、最終的には機関を壊滅することだ。

そしてホロウ・ナガレがそうする理由は、未だ判明していない。そもそも彼の出自も不明であり、機関にはいる前は一体どこで何をしていたのか　それすら分からない。

適正者として勧誘された男だが、既にその時点で特異能力を有していたのではないかという可能性すらあるが、それは飽くまで可能性に過ぎない。そしてまた、だからどうというわけでもなかった。

「ドイツに協会の姿を見たとの事で様子見に行つた際に接触し、こ

の手紙を渡されたわけだが……セツナが居たらしい」

「セツナ……って、あの石膏仮面の？」

「やはり知っていたか。『我の名前を出せば分かる』と言っていたが……そいつから言伝だ。『お前の判断が全てを決する』らしい。随分と、私の知らないところでお前の存在は大きくなっていたようだ」

「……なんつーか、オレが何したって話だよ」

「さあな。その能力が欲しいん<sup>ちから</sup>じゃないのか？」

「迷惑な話です。殺しあつた仲だつていうのに……」

セツナという男。

彼が協会に深い恨みを抱くきっかけとなった作戦に参加していたが、なぜだかその時、命を守ってくれたことがあつた。だから心を許しているというわけではないのだが、殺すべき人間の中には入っていない。

なんらかの形で、協会や機関とは全く関係のない場所で生きていて欲しいと思うだけだ。

衛士は内心にそう漏らしながら封を開ける。

中から引き出す便箋は一枚であり、封筒の中にはそれだけが入っていたようだった。

「本当に手紙だな……」

レックスが関心があるように手紙を見つめる。

機関のある程度の情報を受け取った彼にとつて、機関にとつてもイレギュラーであるこの接触は非常に興味深いものだろう。この内容によつて、また自分がどこに行くべきかを決めることになるかもしれない。

もっとも、既に気持ちは固まっているから、相当のことがなければ気持ちは揺るがないのだが。

「えーと、なにになに……？」

広げると、その味気ない便箋には小さな文字が列の最後まで書きこまれていた。それに少しばかりげんなりして紙を近づけ、凝視す

る。それから衛士の表情が強張っていくのを見て、彼らは内容を推して量った。

「あー、ひでえ話だなこりゃあ……どうなってんだ？」  
誰にともなく独りごちる。

これがまずはじめにエミリアの手に渡ったのならば、恐らく彼女の配慮から中身は確認されては居ないのだろう。もともと、こんなものが衛士以外の眼に入れば、確実に彼のもとに届くことはなくなる程の内容だった。

一通り目を通し、理解する。

衛士はそうしてから深く嘆息して、便箋を封筒に戻す。

「口外出来る内容か？」

エミリアは問う。

衛士は少し考えてから、眉間にシワを寄せ、困ったような表情で頷いた。

「簡単に言えばそうだな、まず一つが」

「ちょ、ちよつと待って」

「ん、どうしました？」

「一つって、紙一枚にいくつ内容が書いてあった？」

「二、三程度ですかね。……あ。良い報告と悪い報告、どっちから聞きたいですか？」

「そついうの良から」

彼女は意気込むように、コーヒを飲み下す。それから胸の奥から息を吐いて、衛士へと向き直る。

レックスは頬杖を付いてまさに他人ごとだが、視線は彼へと向いていた。

「じゃあいいか？」と衛士が問えば、二人はそろって首肯する。

「まず一つ、『ドイツの機関が協会の手に堕ちた』。きつかけは、オレが特異点を勝手に殺したからだそうだ。おかしい話だよな、向こうから依頼があったとか聞いたのに」

「……それは、オモシロイと思って言ってるのだとしたら一度思い

切り殴り飛ばすぞ?」

「そう言いたいのは山々ですが、分かってますよね? 話を聴いてください」

「うそ、だろう?」

「少なくともこの手紙に書いてあることが全て真実なら、本当なんでしょうね」

顔の前に封筒を持ち上げてアピールする。

彼女は、にわかには信じられないという面持ちで、されど驚きを隠せずに目を見開く。焦点は合わずに足元へ、そして窓の向こう、天井とを行き来する。

確かに信じられない内容だと思う。そしてこういった動揺や疑いを持たせることが、彼らの作戦なのかもしれない。だが、だとすれば何故わざわざ衛士にそれを渡せと命じたのかという疑問が残る。

「『時間操作という技術を持っていて、なぜ未来から人が来ないのか、と疑問に持ったことはないのか?』と書かれている」

「どういう意味だ」

「なぜ、ナガレが機関を去って、機関を潰そうと画策しているのか。そして僅か二、三年で、なぜこれほどまで手際よく付焼刃スケアクロウという存在が生まれたのか……オレは知りたくはありませんけどね」

「……っ!」

衛士は続ける。

これが最後に綴られている内容だ。

「”お前は誰かを守りたかったんじゃないかったのか?” というのがオレに対する言葉です」

「キミは、その意味がわかったのかい?」

「ああ、身にしみるくらいな。オレは今から一週間後、ドイツへ飛びます。不安だからハーガイムさんとスコールにもついてきてもらいます」

そして今日から一週間の間は、ハーガイムにみっちり鍛えてもらうことにしよう。

場合によつては、狙撃技術を鍛えてくれたヤコブもつれていくこともなりそうだ。

「ドイツへ行つてどうするつもりだ」

「オレは連中に合わなければなりません。今まで戦った協会よりもまだまともな連中に」

「畏だろう？」

「だとしても。行かなければ何も始まらない。実際にドイツがどうなっているか確認する必要があるだろうし 心配なら、今回みに転送で助けに来てくれるんでしょう？」

引きつったような笑みを見せると、釈然としないようにエミリアが首を振る。

「血迷っている！ そんな手紙を……」

信じるのか？ 口にしようとして、思わず止まった。

信じるも何も、ようやくして伝えられたその内容には信じるも何も、ドイツの機関のくだり以外に何かを伝えようと意図しているものはない。

そしてまた、エミリア自身が思わず反応してしまったこともあって、強く出ることが出来なかった。

「協会が動いているんです。誘っているんでしょうが、少なくともこの手紙が来たということは、そういうことです。均衡状態だったのに、協会が動いた……これは機関が対応すべき機会だ」

何かが 決定的なまでに変異する。

そついった予感がする。

とてつもなく悪い予感だ。直感に過ぎず、信びよう性や何やら以前の問題だが、こんな所で留まっている理由はない。

衛士は立ち上がつて、手紙をテーブルに置く。それと共に、壁に立てかけられた狙撃銃を肩に担ぎ、足元の机から部屋のカギを取り出した。

「オレは訓練所に籠ります。ハーガムさんの都合があれば、彼と」それから、と、カギをレックスの前に落とす。しかし彼は、衛士

から視線を外さなかった。

「部屋は好きにしてい。戸締りはくれぐれも気をつけてな」

「おい、エイジ！ 任務の命令はまだ無いし、あったとしても貴様が選ばれるとは限らないぞ！」

「そうだった場合は、ここがどうなるかわかりませんけどね」

「……そうか。ナガレはこの位置を知っているのか……」

「ええ、それじゃあ」

「おい、待て……！」

手を伸ばして腕をつかもうとするエミリアを避け、制止もきかずに衛士は足早に部屋から出ていってしまう。

二人はその姿を為す術もなく見送ることしか出来ず ややあつて、エミリアは手紙に手を伸ばした。

そしてその内容を拝見して、絶句する。

この内容をよく掻い摘んで説明できたと感心できる言葉が並ぶ。それを見て、また協会が動いているとがどうしようもなく確信でき  
て……。

ポケットの中で、通信端末が着信を告げるように電子音を鳴らした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980x/>

---

その男、神の眼につき part2

2011年10月10日03時26分発行